

元夜間パイロットの白昼期

ハイキック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

飛ぶ理由はただ星を見るため。夜に魅入られ夜を飛ぶためだけに生き延びたが新しい基地での仕事は昼間班だった主人公のお話。

目次

| | |
|-------|----|
| 第十二話 | 77 |
| 第十一話 | 71 |
| 第十話 | 65 |
| 第九話 | 59 |
| 第八話 | 53 |
| 第七話 | 47 |
| 第六話 | 41 |
| 第五話 | 35 |
| 第四・五話 | 31 |
| 第四話 | 24 |
| 第三話 | 20 |
| 第二話 | 12 |
| 第一話 | 1 |

第一話

その飛行ぶりにヴィルケは思わず頭を抱え、隣に立つ坂本は眉に皺を寄せた。杖のようにして刀を握る手には見て取れるほどの力が込められている。

ブリタニアの空はいつも通り灰色をし、青と金色のクロステルマンはそのキャンパスによく映えた。対する少年は灰色の空に同化するようだった。暗緑色のカールスラントの軍服だけが速度も相まって浮かんでるような錯覚を見るものに与えた。

「噂は聞いていたがここまで手を抜くとはな」

空戦の専門家とも呼べるウィッチの二人の目には、少年の飛行は手を抜いているように映った。

訓練所で最初に叩き込まれる基本的な機動をどこまでも突き詰めたような飛び方には、人目を引くような華々しさもなければ、敵を驚かせる意外性も無い。ただただ理詰め飛ぶ。

初めこそクロステルマンは「所詮教科書」とせせら笑っていたものの、実際の結果はあまりに一方的で、青かった制服は黄色く染め上げられ、大して青年は汚れは愚か疲れ一つ見せない。淡々と事務処理のような飛び方はおおよそ本気というものを感じさせない。

「二人とももういい。降りてきてくれ」

「私はまだやれますわ!」

「もう充分よ、ご苦労様ペリーヌさん。バッテム曹長は帰投後執務室まで来るように」

バッテムは短く「了解」とだけ返すと、対戦相手であったクロステルマンを一瞥することも無く速やかに帰投した。

ハンガーから執務室への道すがら、バルクホルンとすれ違った。お互いにカールスラント軍人であり、過去にホークエッジ基地に詰めていた事から、数年来の知人ではあるもの、お互いに進んで話すことは無かった。

執務室へ入ると、厳しい雰囲気ヴィルケと坂本がバッテムを待ち構えていた。

「やっと来たわね」

「お待たせしました」

「早速だが、さっきの模擬戦はどういうつもりだ」

「どう言うつもりと聞かれましても……少佐が実力を見せろと仰ったので、実力を見せました」

「それで手を抜くのか」

「手を抜いたつもりはありませんが、だとしても私の実力はお分かりになられたかと」

「坂本少佐、あれは彼の本気よ」

「あれがか？」

バツヘムは顔を顰めた。それに気づいたのか坂本はばつが悪そうに頭をかいた。

「最前線に相応しくないと思われるのでしたら遠慮なく送還処置をお取りになってください」

「悪かった、すまない。それで今後についてだが、これまでは夜間を飛んでいたそうだが、ここでは昼間班に入ってもらおう」

「私の実力では夜を任せるのが不安ですか。それでも何年間も夜の空を守って来た実績はあるつもりですが」

「そういう事じゃない。ああ、ミーナ、説明を頼めるか？」

「ここには既にリトヴァク中尉がいるので、不足がちのナイトウィッチを一箇所に二人も、それも屈指の実力を持つ人を置けないのよ」

「だったらなんで呼んだ」

声色や抑揚こそ普段通りだが、確かな怒気があった。ヴィルケはかつての付き合いからバツヘムにこのような側面があることを知っていたが、坂本は初対面でその事を知らされてもいかなかったために固まってしまった。

「オラーシャで問題ばかり起こすので私の目の届くところに置くことにしました。本当になんと営倉に入れば気が済むのかしら」

「命を賭して戦うほど私は軍にも故国にも人類に対しても思い入れはありませんので」

むしろ、と言った顔を見せなくなかったのか、バツヘムはおもむろ

に顔を伏せる。坂本は手元の彼の経歴書に目を落とした。

士官学校を素行不良で中退後、十歳にてスオムスへ義勇兵として派兵。スオムス義勇独立飛行中隊にて初戦闘及び初戦果を上げ、世界初の大規模撃墜例でもある爆撃型ネウロイとの戦闘時に負傷。療養のためカールスラントで半年の入院とリハビリを行う。

退院後、スオムスでの戦果を認められカールスラント空軍第三戦闘航空団に所属。ダイナモ作戦終盤にて被撃墜。約一ヶ月間の消息不明を経て戦地より生還。ブリタニアでの療養後オラーシャ方面へ派兵、そして現在に至る。

中退を除けば概ね優秀な兵士と呼べなくもない経歴だ。

「この物資も何も無い戦地で一ヶ月もどうやって生き延びたんだ？」
「話したくありません。それについてはヴィルケ中佐がよくご存知かと」

「気持ちのいい話じゃないし、バツヘム曹長が嫌なら話すべきじゃないことよ」

察しが付いたのか坂本はそれについて深く聞き出さず質疑応答を続けた。その結果、特に問題視するようなものは無かった。命は賭けないと言っていたが、死にたくないのは坂本自身も変わらないし、彼が命令違反した結果誰かが危機に晒されたという事もない。むしろ彼が頻繁に命令違反をするようになったのは、撤退戦にて無茶な戦いを強いられてからだ。

「私はなぜ面接のようなことをされてるのですか。その手元の資料にも記されてますし、中佐がいらっしゃるのであれば私の軍に入っただけの事は私に聞くまでもないと思われませんが」

「私の目と耳で本人から確かめたかったんだ。気を悪くしないで欲しい」

「話はこれでおしまいよ。坂本少佐もいいわね」

坂本は頷いた。

「それと最後に、今晚の夕食のだけど、あなたにお願いしてもいいかしら」

「来た時に受けとった資料では、今日の当番は私ではありませんでし

たが」

「あなたの得意料理を振る舞えばすぐに隊に溶け込めると思ったのだけど」

「どちらにせよ、上官としてご命令されるのであれば料理します」

「これは私からの提案——」

「でしたらお断りします。失礼します」

返答も待たずして出ていくバツヘムに二人は各々の顔をした。苦笑いのヴィルケは持っていたバインダーを机の引き出しにしようと大きく伸びをし、坂本の方へと向き直った。

「どういう子か、だいたい分かったでしょ」

「特に最後のでな。実力はまあ申し分ない。百十三機の撃墜数も偶然できるものじゃない。ただ……」

ヴィルケはその先が言わずとも分かったのか、頭を抱えた。

501統合戦闘航空団は比較的新しい部隊である。出会って間もなく、それぞれの背景も大きく違うため一丸からは程遠い。それに加えて初対面のクロスステルマンに色合い含めてハリネズミのようだと思わせるバツヘムが来てしまった。

ヴィルケの予定では、バツヘムを近々創設されるオラーシャ方面の部隊に渡す代わりにほかの優秀なウィッチを、という物だった。バツヘムは貴重なナイトウィッチであり、素行こそ問題はあるが優秀でもある。絶対に上からの待ったがかかると踏んでいた。

しかしバツヘムの悪評はそちらでも広く知れ渡っていたため、要請したら本当に来てしまったと言うのが彼女の本音だ。

バツヘムの部屋は宿舎の最奥にある。普段の業務との兼ね合いから整備隊員と同じ宿舎にすると不都合が多いため、特例的に許された。バツヘムは女絡みの問題に疎く、噂すらなかったのも一因である。

そんなバツヘムの部屋の前には黒髪にやけた肌のルツキーニが立っていた。バツヘムを見るなり「待ってました」と言わんばかりに駆け寄った。

「今日もですか？」

「うん、飴ちようだい」

「分かりました、部屋には入らずそこで待っていてください」

バツヘムは部屋に備えつけられた棚から細長い瓶に入った大玉の飴を一粒取り出した。彼の部屋には飴の他にもチョコレートや煙草や酒のような嗜好品が多くある。少し融通を効かせて貰うためのもので、彼には酒とタバコの趣味はない。

「どうぞ」

「ありがとう」

「その代わりではありませんが、これを中佐に渡して頂けませんか？」

飴と一緒に取りだしていたコーヒー豆の袋をルツキーニに手渡した。ここへ来る際、軍の高官からウィツチの写真と交換で譲り受けた物だ。ヴィルケとの折衝に使う予定だったが、高官の保存が杜撰だったため、劣化する前に処分することになった。

「中佐ならご存知でしょうが、あまり長持ちしないことを一緒にお伝えください」

「ユニヴェルって思ってたよりいい人なんだね」

幼さと性格から察したのか、バツヘムは言葉通りに受け取った。

「ペリーヌはすっごい怒ってたけど」

「あれは模擬戦なので仕方ないんですけどね」

「そうだ、ユニヴェルもシャーリーに紹介してあげる！」

「いや、昨日全員から紹介は——」

「いいからいいから付いてきて」

飴を口に放り込むと空いた手でバツヘムの手を握りしめ走り出した。性差や体格差から振り払うことは容易だが、バツヘムは大人しく付いていくことにした。

バツヘムを連れたルツキーニが向かった場所はハンガーだった。そこでイエーガーは自分のユニットを開きパーツを弄り回していた。

「シャーリー」

「おおルツキーニ……とユニヴェルか。珍しい組み合わせだな。まあまだ来て一日目だけだ」

「うん、さつきね、ユニヴェルに飴貰ったんだ」

「そうか良かったな。それで何か用か？」

「ううん、別に。あつ、これミーナ中佐に渡してくるから待ってて」
コーヒー豆の袋を片手に駆けつけていくルツキーニを見送った二人は初対面特有の気まずさに居心地が悪そうにしていた。

「そう言えばさっきの模擬戦見たぞ。何となく学校を思い出した」

「基本通りに飛びましたので。それよりも、ユニットを改造してるんですか？」

「もつとスピードが出せるように弄ってるんだよ。ユニヴェルはこっち系に詳しくあったりするのかな？」

「基本的な知識しかありません」

「だよなー。それにしても、ルツキーニに気に入られるなんて、ユニヴェルを少し誤解してたみたいだ。改めてよろしくな」

イエーガーが突き出した右手を少し間を開けてバツヘムが握り返した。するとイエーガーは苦笑い気味に「握手する時は手袋は外すもんだぞ」と言った。

「お見せできるような手ではありませんので」

「あたしは軍人なんだから気にしないって」

「……でもやはりやめておきます。申し訳ありません」

「そう言えばさ、独房とか営倉とか慣れてるんだろ。今度私が入った時用に何か楽しみ方でも教えてくれよ」

「簡単ですよ」

「ホントか？」

「独房の監視兵にタバコを渡すと、本を持って来てくれます」

「それは買収っていうんじゃない」

「常套手段です」

バツヘムは上着のポケットからシガーケースを取り出すと、それをイエーガーに勧めた。イエーガーは「なるほどなあ」と呟きながら断った。他にも彼の上着のポケットには飴が三個忍ばされている。

「にしても見ればを見るほど男とは思えないよな」

ニヤニヤとしながらバツヘムを上から下まで見回した。

「中佐に聞いたけど料理なんかも得意なんだろ？」

「ええまあ母に仕込まれましたので」

「今度なんか作ってくれよ」

「上官としてご命令されるのであればいつでもしますが、それ以外ではあんな事したくありません」

「そつそうか」

「ではこれで失礼します」

「おいルツキーニはどうするんだ」

「お任せします」

バツヘムはルツキーニとすれ違わないよう反対方向から自室へと戻った。数分もしないうちに戻ってきたルツキーニは、バツヘムが既に居ないことにおもむろに肩を落とした。

「せつかくパスタ作れるか聞こうと思ったのに」

「まあまあ、それくらいならあたしが作ってやるから」

「ほんと!？」

「ああ本当だとも」

「ありがとうシャーリー!」

日が沈み切ろうという頃、バツヘムはリトヴヤクと鉢合わせたその瞬間、二人の魔導針に反応が現れた。間髪入れず二人はハンガーへと走り出した。

ネウロイ接近のアラームが鳴り響く中、いち早く駆けつけた二人に続いて他の隊員も集まると、ヴィルケが指示を出し始めた。

まず敵の位置情報と数を伝え。そのどれもが隊員たちにとって概ね予想通りだったためか慌てた様子はない。

次に出撃するメンバーを発表した。

「会敵時刻には既に日が暮れている事が予想されます。目が順応していない状態での夜間戦闘は危険と判断し、夜間哨戒に備えていたリトヴヤク中尉に出撃を要請します。やってくるか知ら」

「はい」

「一人で行かせるのですか」

「そうだ、サーニヤが行くなら私も行くぞ」

バツヘムの指摘に乗りかかる形でユートイライネンが不満を口に

した。ヴィルケが鋭い目付きでキツと睨むと、ユーティライネンは少しだけたじろいだ。バツヘムは怖気付くどころか一步前へ歩み出た。

「私も行きます」

「許可できません。それに今回の敵戦力的にサーニヤさん一人で十分すぎるわ」

「万が一リトヴァク中尉が撃墜された場合、基地から再発進していたのでは間に合いません」

「あなたがその使える戦力と言いたいのかしら」

「サーニヤがそんな簡単に墮とされるわけないだろ。というかそれなら私の方がやれる!」

「とにかく二人の出撃は許可できません。サーニヤさん、出撃準備」

「はっはい!」

「他の皆は戦闘待機。少佐、あとはお願いするわ」

「ああ任せておけ」

リトヴァクを見送った後、ヴィルケ以外の隊員はミーティングルームへと移った。

万が一の戦闘に備え灯りを落とされたミーティングルームで少女らは特に何をすることも無く待つことになった。本を読もうにもあまりが無いので読めず、月明かりに頼ろうにもブリタニアの空は曇っている。

「それにしても意外だったなあ。エイラはともかく、まさかユニヴェルが志願するとは思わなかったよ」

明るい声色でイエーガーは言う。

「ああでも元々ナイトウィッチっていうかナイトウィザードだったか」

「ええまあ」

「私はそれ以上に、あなたのような人が他人を心配できることの方が意外でしたわ」

「そんなことないよなー、なっルツキーニ」

「うん、ユニヴェルはいい人だよ。お菓子くれるし」

「まあお安いこと」

バツヘムの頭の中からネウロイ特有のノイズが消えた。それはリトヴヤクがネウロイを全滅させたことを意味し、同時にバツヘムの出撃機会がなくなったということでもある。

「少し出てきます」

バツヘムは立ち上がると坂本の方を向いて言った。

「どこへ行くんだ？」

「タバコです」

坂本はあまり善い顔をしなかったが、了承した。

ミーティングルームのすぐ側にある窓から外へ抜け出ると、少し歩き、オープンテラスへ続く石段に座り込んだ。

上着の胸ポケットからシガーケースとマッチを取り出し、ぎこちない手つきで火をつける。タバコを啜え、息を吸い込むと同時に噎せてしまった。

「やっぱタバコなんて吸うものじゃない」

タバコは安くないため捨てるのが勿体なかったのか、噎せながら吸いきることを決めた。

インカムから伝えられる作戦終了の旨も噎せて聞き逃せそうだった。

「いつから愛煙家になったのかしら」

ついさつきまで管制にいたはずのヴィルケの声にバツヘムは驚いてタバコの灰を膝にこぼした。熱さによるめくようにして立ち上がると、クスクスと笑う声が彼の耳に届いた。

「タバコなんて嫌いです」

「なら吸わなければいいのに」

「……何か私にご用ですか？」

「さつきコーヒーのお礼を言いそびれたから」

「どうせ頂き物でしたので構いませんよ。傷んでしまっても勿体ないですし」

そう言いつつやはり吸いきれないと判断したバツヘムは携帯灰皿でタバコを押し潰した。

「吸わないのにどうして身につけてるの？」

「前の基地は喫煙者が多かったもので、かなり便利なんです。立地的に酒かタバコしか娯楽がないせいなんでしょうね」

先程とは違い慣れた手つきでヴィルケにタバコを勧める。それをあっさり断られるが、バツヘムも承知の上だった。

「私は酒もタバコも嗜みません」

「とうにかまだ十五でしょ」

「ええ、はい」

「……噂には聞いていたけど、本当にナイトウィッチになったのね。急にどうして目指したの？」

「ネウロイの支配地域に一ヶ月間ホームステイした時に沢山星を見たいんです。毎晩ではありません、曇って見えぬ日もありました。どうにかなってしまいたいような所を沢山助けてもらいました。その恩返しに夜空を守ることにしたんです」

普段のバツヘムからは想像出来ないような答えだったらしく、ヴィルケは思わず吹き出してしまった。バツヘムの真剣な眼差しを思い出して笑いを飲み込むと、軽く謝罪をして、痛ましいものを見るような目でバツヘムを眺める。

彼女の目に重なって見える十一歳のバツヘム。それは不自然に少女然としたウィザードと出会った頃のことを思い出させる。

決して扱いやすい部下ではなかった。命令は聞くが、何を考えているのか要領が掴めない、十一歳の子どもとは思えない仮面を身につけていたからだ。また彼自身も積極的に自らの事を語ろうとしなかった。

そんな不気味な少年の秘密を知ってしまった時は出処不明の罪悪感に胸を締め付けられたことも、彼女はしっかりと覚えていた。

「あの戦闘が終わるたびに隠れて泣いていたあなたが志願するなんて信じられなかったけど、そういう事だったのね」

「わがままを言って申し訳ありませんでした」

「これからは昼を飛んでもらうことになるけど、やっていけそうかしら」

「仕事なら仕方ありません。今更そこに文句なんて言いません」

「これからよろしくね」

差し出された手に同じように右手を出そうとした瞬間、バツヘムは少しだけ躊躇うような素振りを見せた。

「手袋ならそのままで構わないわよ」

「ありがとうございます」

改めて握手を交わした二人は食堂へと足を向けた。

第二話

「ねー、なんで私にはお菓子くれないの」

六月の昼下がり、ラウンジで新聞を読み耽るバツヘムに、ハルトマンは唐突に言った。

「一度もねだられた覚えはありませんが」

「そこはさあ、こんな可愛い私に自ら——」

「どこへ行つたんだハルトマン！」

「まずっ、隠れるからトウルデーに黙っててね」

ハルトマンは窓から飛び出し、窓下の壁に体を寄せた。間髪入れずやって来たバルクホルンは部屋を見回し、バツヘムに詰め寄った。

「ハルトマンの奴を見なかったか」

「どうかしたんですか？」

「あいつ、また訓練をサボったんだ。今度という今度は徹底的に絞つてやる」

「いいえ見てません」

そう言いながらハルトマンの隠れている方を指さした。それを理解したバルクホルンは「分かった」と応え窓の方へ走った。

急激に近づく足音に異常を察するも座った状態からは逃げることも出来ず、あえなくハルトマンはバルクホルンに捕まった。

「バツヘムの裏切り者！」

「匿うなんて一言も言つてません」

「随分と元気そうじゃないかハルトマン。これならたつぷり訓練ができるな」

「えー勘弁してよ……そうだ、それならバツヘムも一緒にどう」

いかにも作り物な笑顔を浮かべるハルトマンは、服の襟を後ろから捕まれ逃げることを断念したものの、ならば巻き添えと言わんばかりに提案した。

「遠慮しておきます」

「そんなことを言うなバツヘム。ちょうどいい、私も参加しよう」

計ったようなタイミングでやってきた坂本がバツヘムに参加を促

した。少しの間黙ったバツヘムだったが、徐に立ち上がると坂本の方をむいて「どうしてもですか」と聞いた。それに坂本が頷いたのを見るやいなや、目くらましのように新聞をばらき窓から飛び出した。

逃がすまいと、坂本も飛び出した。あと少しで服を掴めそうだったその瞬間、バツヘムはオーブンテラスへ続く階段の最上段から飛び降りた。

「嘘おー！」

一部始終を見ていたハルトマンから出た言葉を後目に、芝生の上でしっかりと受身をとったバツヘムは目にも止まらぬ速さで走り去った。

「あれは少し捕まえられそうにないな」

「そういう訳だハルトマン、いくぞ」

「うわあ、ずるい！」

バルクホルンに引きずられていくハルトマンとは対象的に、肩で息をしながらも逃げ切ったことを確信したバツヘムは小さく拳を胸の前で掲げた。今朝の事がなければ逃げなかつただろうと、空に浮かぶ三人の姿を眺めながら思った。

バツヘムの朝は早く、日課としてランニングを行っている。それも今日までだと彼は決心済みである。

いつもと違うコースを走っていると、刀の素振りをする坂本と遭遇した。そして延々と続く素振りに付き合わされた末、現在の決意が生まれた。

坂本の自主訓練には絶対に付き合わない。

先程ばらまいた新聞を片付けるためにラウンジへ戻ると、ビショップが既に片付け始めていた。

「すみません、私が自分で片付けます」

「えっ、あっはい」

「ありがとうございます」

ビショップが既に集めた分の新聞紙を受け取り、残りの物を拾い始める。その様子をビショップはまごまごとしながら眺めている。

ビショップはバツヘムが配属になる前から一方的に知っていた。

彼女の姉であるウイルマ・ビショップがダイナモ作戦に参加しており、バツヘムが生還した際、ウイルマの口から聞かされていた。他にもバツヘム自身の知名度が、スオムスでの戦果故に高く、彼の生還がプロパガンダのために報じられていた事も理由の一つである。

そんなビショップにとって、実物のバツヘムは意外の連続であった。人や新聞から聞く彼の話から想像したバツヘム像は、いかにも軍人と言った屈強な男の姿だったが、実際は自分と同じかそれ以下のサイズの少年だった。

「よし。手伝ってくださってありがとうございます」

「いえそんな、ほとんど何もしてません」

「これはお礼です。今渡せるものが飴くらいしかなくて、こんなもので良ければどうぞ」

妙に律儀なところも意外な点である。

渡された赤い飴を見つめながら物思いに耽けるビショップの横を通り過ぎようとしたその時、突然ビショップがバツヘムの手首を掴んだ。驚いた様子のバツヘムとビショップは数秒ほど見つめあった。

「えつと、何か」

「……ごめんなさい！ なんでもないです」

「犯人は現場に戻ると言うが、あれは本当だったようだな」

「坂本少佐っ」

「逃げないほうが身のためだぞバツヘム。ちようどいい、リーネお前も一緒に来い」

「私は今日非番なんです」

「それはさつき言うべきだったな」

バツヘムは何を言っても無駄と悟り、諦めて訓練をすることにした。巻き込まれる形でビショップの訓練も始まった。バツヘムへのものは滑走路を横にダッシュという、どちらかと言えば罰則のような内容だった。足を緩めようにも、書類仕事終わりのヴィルケが見張っているため手は抜けない。

「タイムが落ちてるわね、もう一本。はい！」

ヴィルケが打ち鳴らした手を合図にバツヘムは走り出す。バツヘ

ムが戻ってくるまでの間、ヴィルケはビシヨップが泣きそうな顔で坂本に追い回され何度も撃墜を取られる様を眺めていた。

「美緒も容赦ないわね」

「くっそ、訓練学校よりしんどいぞ」

「無駄口はやめなさい、もう一本」

「ミーナ中佐、鬼だな」

「何かしらエイラさん、あなたも走りたいのかしら？」

「なんでもないです」

戻ってきたバツヘムは膝に手をつけて荒い呼吸を繰り返した。走り始めて既に三時間が経過し、往復六十メートルのタイムも八秒後半だったものが十秒台まで落ちた。

そんなバツヘムを見かねてヴィルケは微笑んだ。

「バツヘムさんも疲れてきたみたいね。じゃああと五本連続で十秒切れたら終わっていいわ」

「うわあ」

「じゃあエイラさん、あとよろしくお願いすわね」

「ああうん、分かった」

ヴィルケが去り、七本目を走ろうとするバツヘムをユートイライネンが止めた。

「なに律儀に走ってんだよ。絶対出来ないから適当に切り上げた方がいいって。ミーナ中佐もそのつもりで言ったんだろうしさ」

「……私もそう思います」

「じゃあもうやめやめー」

「でも後でバレて困るくらいなら今走ります」

「はあ付き合わされる私の身にもなれよな。次行くぞー」

一時間かけて、バツヘムはようやく課題を終えた。疲れきつてすぐにも座り込みたい所を、坂本らの着地の邪魔にならないように滑走路からハンガーの搬出口横まで移動した。

時を同じくして飛行訓練をしていた四人が着陸した。なんの反応も示さないバルクホルンとは対極的に、ハルトマンは舌を出してバカにしたような態度をとった。今のバツヘムにはまだそれを相手にし

ている体力はない。

「まさかずっと走ってたのか」

「びっくりするくらいずっと走ってた」

呼吸の整わないバツヘムの代わりにユーティライネンが答えた。

「こんなになるまで走らせるつもりはなかったんだが……まあこれに懲りたら訓練から逃げないことだな」

「バツヘムは今日の訓練休みだぞ」

「それならそうと初めから言えばいいのに逃げるから」

「スオムスにいた扶桑人は休みとか関係なしに訓練強いてきたのでいい」

ようやく話せるようになっての第一声はスオムス義勇独立飛行中队にいた頃のことだった。彼の言う扶桑人に心当たりのある坂本は苦笑いをした。

「そう言えばお前は智子さんの部隊にいたんだったな」

「二ヶ月だけでしたけどカウハバ基地に勤めていました。なんというか……刺激の強い場所でした」

納得したユーティライネンと、対照的に疑問符を浮かべる坂本を、置いてバツヘムは着替えを取りに部屋へ立ち寄った後、シャワーを浴びに男性宿舍へ向かった。

手早くシャワーを浴びると、今度は食料庫から材料を集めて食堂へと向かった。この基地には下士官が彼とビショップしか居ないため、二人が当番で食事を作ることになっている。

料理が嫌いなバツヘムはビショップほど凝らした物を作らないものの、味は概ね受け入れられていた。

ヴェルケにおいてはバツヘムの本当の料理の腕を知っているため、文句こそ言わないが不満ではある。

「お手伝いします」

バツヘムが頭に白い布を巻きエプロンをつけ終えた所にビショップが持ちかけた。ビショップは既にエプロンを巻いており、勢いが余ったのか握り拳を作っていた。

「ではじゃがいもの皮をむくのを手伝ってください」

「はい」

背の低い椅子に向かい合って座ると、ボウルに入ったじゃがいもを一斉に剥き始めた。

「やっぱり意外です」

「何がですか？」

「バツヘム曹長がです。新聞とかお姉ちゃんから聞かされた話と全然違うので」

「新聞はプロパガンダですし、お姉さんとは面識がないので、多分それも人伝の話だと思います」

「時々する女の子っぽい仕草が一番びっくりでした」

「は？」

バツヘムは手元から顔を上げてビシヨップを睨んだ。しかしそれも一瞬のことで、手元から目を離したことが災いし、手をナイフで勢いよく切った。

「すぐに救急箱取ってきますよ！」

「大丈夫、そんなに深く切って——ないのに。行っちゃったよ」

親指と人差し指の股から中指と薬指の股までが切れており、手袋から血が滴っている。

食材にかからないようシンクまで移動しておもむろに流水にさらした。手袋を外そうとしたが、直ぐに救急箱ビシヨップが戻ってくるため手袋はつけたままとなった。

何分もしないうちにビシヨップが箱を抱えて食堂へ戻った。

「消毒するので見せてください」

「自分でするので結構です」

「でも包帯とか——」

「巻けます」

「……わかりました」

「それよりも料理をお願いしてもいいですか。こんな手では食材にも触れませんので」

「はい——」

救急箱を片手に食堂のドアに手をかけた瞬間、反対側からドアが引

かれた。ドアを引いた相手はハルトマンだった。バッヘムは咄嗟に左手を隠したがハルトマンはそれを見逃さなかった。

「どうしたのさその手、血塗れじゃんか！」

「少しナイフで切っただけです」

「ちゃんと処置しないと感染症になっちゃうよ、ほら早く見せて」

「いえ結構です」

「これでも医者志望なんだから信用してよまったく、ほら」

無理矢理手袋を剥ごうとするハルトマンが引っ張るあまり、切り口から脆くなっていた手袋がビリビリと音を立てて破けてしまった。

手袋の中から出てきたのは裂傷と熱傷の後に浅黒く皮膚が所々溶けたような皺だらけの手だった。

それを見て固まるハルトマンの手を振り払い、ポケットに隠した。

「説明しなかった私が悪いのでお気になさらず」

それだけを言うとハルトマンの横を通り抜けて部屋へ足を向けた。

そういう物を初めて見た訳でもないのに酷く落ち込むハルトマンと、間近で目にするのは初めてのビショップはお互いに顔を見合わせでは気まずそうに顔を逸らした。

治療を終えたバッヘムは早足で食堂へ戻った。申し訳なさそうな二人を見て、案の定と言った顔をした。

「ユニヴェル、まさかそういう事だとは思ってなくて……本当にごめん」

「気にしてません。それよりもこれから夕食なので引きずられる方が迷惑なので、もう気にしないでください」

バッヘムが勤めて柔和な態度で言うも、おづおづ了承を得るのが限界だった。

ぎこちない雰囲気でも食事も済ませ、もう寝ようかと言う頃、ハルトマンがバッヘムの部屋を訪れた。

「どうしたんですか？」

「やっぱりさつきのこと謝りたくて」

「その事でしたら気にしてません」

「でも見られたくないから隠してんでしょ。なのに私のせいで……ご

めんなさい!」

「分かりました。でしたらやって欲しいことがあります」

「なっなに?」

「今後私を訓練に巻き込もうとしないでください」

ハルトマンは胸を撫で下ろした。もつとすごいことを要求される
と思っていたと言わんばかりの態度だった。

「じゃあもう私をトウルーデに売らないでよ」

「それは保証できかねます」

「えー、でもわかった……あの事は絶対誰にも言わないから」

「ありがとうございます。それではおやすみなさい」

「うん、おやすみー」

ベッドに戻った彼は手袋越しに出来たばかりの傷を眺めた。軍人
になりたかった訳では無い彼にとって、その傷は理不尽の象徴とも言
えるもので、故に手袋で隠して見えないようにしてきた。

気分が落ち込みすぎる前に目を閉じ、昼間の訓練も相まってバツヘ
ムは驚くほどすんなりと眠った。

第三話

二ヶ月前、着任したばかりのバツヘムを見てヴィルケは「随分変わった」と呟いた。

彼女が知っている十三歳バツヘムから約三年の乖離があるとは言え、ここまで変わってしまうものなのかと、ヴィルケは悲観した。

とくに変わった点は社交性だった。以前は自分から話すことはなく、話しかけられても「はい」と「いいえ」しか答えないような少年だったが、今では冗談や嫌味、買収工作まで覚えている。オラーシヤではかなり暗躍したとヴィルケは聞き及んでいた。

この基地でそんな問題を起こされると軍上層部に付け込まれかねないと判断した彼女は、坂本が扶桑へ経った今、バツヘムに執務の手伝いを命じた。

「発注書がありました、ご確認を」

「問題ないわ。というかあなた……」

ヴィルケは感心したように、むしろ自分で書いたような書類の出来の不気味さを隠すように言った。よく見ないと分からないほど自分の文字と似ているところが特に気味が悪い。

「オラーシヤに務めていた頃より時々隊長に代わって書類仕事はしていました」

「道理で現場の人間からの評価が高いわね」

「現場の評価が高いと無茶が効くんです」

「不祥事を揉み消したり？」

「そんなことしませんよ。まあでも簡単に手放されるあたり、そこまですで好かれてはなかったようですが」

「字を真似る訓練もそこで？」

「出来ることは多いに限ります」

「あの消極的だったバツヘム軍曹だったとは思えないわね」

ヴィルケはバツヘムの目から辛うじて「何が言いたいんだ」と、言外の問いかけを読み取った。

ヴィルケは彼がダイナモ作戦時に墜落した後のことを知らない。

一ヶ月間の失踪と帰還については知らされていたものの、彼女らに後方へ療養目的でさげられた者を心配している余裕などなかったためだ。

そのまま作戦が終了してもヴィルケは新部隊を組織するために奔走していた為、彼のオラーシャ行きが通達されても顔を合わせることは無かった。結局二ヶ月前に至るまで、ヴィルケは彼の足取りを紙の上でしか知らなかった。

「前より少し顔に出やすくなったかしら」

「そうですか？」

「ええ、私は今の方が可愛くて好きよ」

バツヘムの目付きが一層険しくなるのをヴィルケは感じた。少し突つき過ぎたとも思ったが、あの何を考えてるかまるでわからないバツヘムを把握出来るかもしれないのでよしとした。

「気を悪くしたらなら謝るわ、けど私はあなたの事を知りたいの。だって、知り合って三年なのに私は何も知らないわ」

「上官として部下を把握したいのであれば、それこそ保管してある私の資料をお読みになられてはいかがですか？」

「前に坂本少佐も言っていたけど、自分の目と耳で知りたいの。やはり紙から得られるものとは質が違うもの。もちろん根掘り葉掘りあれもこれもというわけじゃないわ」

「中佐、私は軍規上要求された情報はすでに差し出しています。それ以上を対価も払わず何かを得ようというのは些か傲慢が過ぎるかと思えます」

「そうね、では何がお望みかしら？」

「夜間任務。継続的などとは言いません、次の新月の日の夜間哨戒任務に就かせてください」

ヴィルケはあえて考える振りをした。要求内容自体は問題なかった。リトヴァクを休ませられるのもヴィルケにとってありがたい話であった。

「分かりました、スケジュールの調整はこちらでしておきます」

「それで何を知りたいんですか？」

「あなたが軍人になった本当の理由」

バツヘムは一呼吸入れると、書類作成を続けながら話し始めた。「一言で言えば母の意向です。母には魔力はありましたが飛行適性はありませんでした、故に現役時代は常に空に憧れて過ごしていたそうです。四歳の頃です。私に強い魔力が現れるとそれまで優しかった母は消え去りました」

話さないことには話さないことなりの理由があると、ヴィルケはよく承知している。しかしそれでも彼女は数年来の付き合いで、これからも長く付き合う相手のことは知っておくべきと判断した。

話の入からはいわゆる国や家、家族や友人を守るためと言った、胸の熱くなるものはまるで感じられなかった。

「当時、父は対ネウロイ兵器の開発のため首都にいました。父はブリタニアと開発競争をしていたわけです。そして母はそれを是とし、協力を惜しみませんでした。妻の在り方としては素晴らしいものなのかもしれません」

「それで、魔力を発現したあなたはどうしたの？」

「母は私に箒を寄越すと、飛べるようになったら呼びなさい、と言いました。母はパイロットではないので飛行の感覚やコツは教えられません。しかしパイロットだった友人からどんな訓練をしていたかは聞いていたのでしょう。飛べなければパンもスープも水もありませんでした。自覚している考え方の一つに死にたくなければということがあります、これはこの頃に培われたものです」

バツヘムの話を続けるべきか何うような視線にヴィルケは一瞬躊躇うも、続きを促した。

「軍人になった理由は母の意向です。正確には、母の考えを受けて、死にたくなかったからです」

「料理をしたがらないのもその母親のせいなの？」

「はい。軍に入るまでは女の子として育てられていたので、料理も洗濯も針仕事も仕込まれました。歩き方だったり言葉遣いだったりそれはもう徹底的に」

「あなたはもう立派なウィザードだけど、その後母親とはどうなの？」

「母は病気で亡くなりました。ちょうど私が療養で帰国していた頃です」

ヴィルケはもう十分だと言いたげに話を止めた。ヴィルケ自身、バツヘムが何かしら事情を抱えていることは想像していた。でなければあのような異様な雰囲気の子どもが出来上がるはずがないと確信もあつた。しかし彼女はここまでとは思ってもみなかった。

どうしても重なってしまう三年前のバツヘムを見て、ヴィルケの気分は一際沈んだ。

「ですので、これからは私のことを可愛いと言うのを控えて貰えませんか?」

「ええ分かったわ」

「ちなみに書類は作り終えたので私はこれで失礼しようと思えます」

我に返つたヴィルケは全く進んでいない手元の仕事を思い出して溜息を着いた。またこのままバツヘムを返したのではわざわざ呼び立てた意味がなくなるので次の理由を探し始めた。その時だった。

「マロニーに目をつけられる様な事はしないので安心してください」

心臓が跳ねた。

「気づいていたのね」

「中佐が避けたい事態で私がすぐにでも起こしうるものを考えるとこれしかなかったのだから」

「問題行動の自覚があつたとは思わなかったわ」

「この基地ではしません。あんなのに利して初めて尊敬できた人を裏切るくらいなら……」

「くらいなら?」

「死ぬのはさすがに無理なので腕一本で許して貰えませんか?」

ヴィルケはクスクスと笑つた。バツヘムが微妙にへタレた発言を真剣そのものな顔で言うものだからおかしくして仕方なかった。それゆえか、ヴィルケはひとまず信じてみることにした。

バツヘムが部屋を去るのを見送ると半分ほどまでしか出来上がっていない書類に再度取り掛かった。

第四話

数日前、初装備、初飛行、初戦闘で大立ち回りを見せた宮藤の才気は、その訓練の姿からは微塵も感じさせなかった。

地上から見上げる坂本とヴィルケとバツヘムは三者三様の表情で同じ感想を共有していた。

「本当にここに置いておくつもりですか？」

「もう少し様子を見ようと思う。素質は十分なんだ、きつと戦力になつてくれる」

宮藤は偶にあつと言わせるような動きをしたかと思えば、次の瞬間にはそれを帳消しにしてあまりある失態を犯す。昨日は近くの村の牛舎に墜落し、その応急修繕にバツヘムが駆り出された。それと対照的にビショップは書面にするような問題を起こさない代わりに、とりたてて褒めるような動きも見せない。

「ところでバツヘム曹長、502のポクルイーシキン大尉からあなたの安否確認が届いたのだけど、どういうことか説明してくれるかしら」

「あー、手紙返してなかったかもです」

「手紙は生存確認も兼ねてるんだからちゃんと言わないとダメだぞ」

「少佐の言う通りよ。ただでさえ私たちは最前線にいるのだから、あまり相手を不安にさせちゃダメよ」

「ここに来るまでは返してたんですよ。でも送る度に文法や綴りが違ふと添削が入って写しが返ってくるのが辛くて」

ゲンナリと言うバツヘムに坂本とヴィルケは疑問符を浮かべた。それを見て取ったバツヘムは補足的に説明をし始めた。

「本が好きなのにオラーシヤの文学に触れられないのは不憫だとかなんとかで、大尉にはオラーシヤ語の授業を受けさせられてたんですよ。手紙はその延長です」

「それがどうしてここに来たら返さなくなつたの？」

「補給とか作戦の打ち合わせで時々私のいた基地にいらつしやつてたんですが、返さないとすごく怒られます。ここならば顔を合わせるこ

とも無いので」

「とにかく取り急ぎ返事を書いて来なさい」

「了解」

バツヘムは踵を返すと、一直線に自室へと向かった。自室の机の引き出しから未開封の封筒を新しい方から三通引き出すと、併せて白紙の便箋と万年筆を持って控え室へ向かった。

控え室ではハルトマンがソファアに横たわって眠っていた。

テーブルの一角を陣取ると徐に手紙を取り出し読み始めた。

「やつぱり怒ってるよ」

短期間に何通も送ってくることから察しを付けていたバツヘムだったが、その怒りっぷりはその予想を超えていた。三通目に至っては流暢すぎる筆記体で、バツヘムには解読すら不可能だった。

「なにこれ、落書き？」

「オラーシヤ語です……多分。というか人の手紙を勝手に見るのはどうかと思えますよ、ルツキーニ少尉」

「どうせ見たってわかんないし。というか見られたくないなら部屋でやればいいじゃん」

「どうしてもしたくないことは人前でしないと雑にしてしまうので」

「したくないことなら別に良くない？」

「かなり怒らせてしまってるので」

「でもこれ読めるの？」

「……無理」

「だよねー、まあ頑張ってたね」

来た時と同様に駆け足で出ていくルツキーニに疑問を残しつつ、バツヘムは再度読めない手紙に目を落とした。手紙と同じように字をなぞったりと工夫をしたものの、結局読めなかった。

「どうしたものか……リトヴャク中尉に頼むか？ いやでもこれ見せるのはなあ。これじゃ謝罪しようにもどれに重点を置いていいかわからん」

手紙を放り出してお手上げと言わんばかりに勢いよく背もたれに体を預けた。

窓の外へ目を向けると既に日が暮れており、ブリタニアにしては珍しく晴れており、月や星が輝々としている。

体を起こし「仕方ないか」と呟いてバツヘムはリトヴァクの部屋を指した。

リトヴァクの部屋の戸をノックすると、仲から真つ先に姿を現したのはユートイライネンだった。

「サーニヤになんか用か？」

「リトヴァク中尉にオラーシャ語の翻訳をお願い出来ないかと思いついて」

「サーニヤは今起きたばかりなんだ、また後に――」

「ダメよエイラ、そんなに無碍にしたら。あの、私でよければ翻訳します」

「お願いします」

「暗いところですけどどうぞ入ってください」

「男を部屋に入れるのか!? もつとちゃんと警戒しないと危ないだろう」

「バツヘムさんは同じ隊の仲間よ。それにそんな言い方したら彼に失礼だわ」

リトヴァクに誘われるまま部屋に入ったバツヘムは、居場所がわからずリトヴァクが机で手紙を読む斜め後ろに控えるように待機した。そんなバツヘムにユートイライネンが「何かしたらただじゃおかない」と睨みを利かせている。

「これ本当に私が読んでしまってもいいんですか？」

「人にお見せするような物じゃないのは分かるんですが、内容まではどうしても分からなくて、申し訳ありませんがお願いします」

「分かりました、多分すぐにできるので待っていてください」

「よろしくお願いします」

十分ほどで翻訳が終わると、リトヴァクはなんとも言えない顔でブリタニア語に翻訳された手紙をバツヘムに差し出した。するとバツヘムが受け取るよりもはやくユートイライネンがそれを引ったくり、内容を読むと「子どもかよ」と笑い始めた。

「やっぱりエイラもそう思う?」

「だってこれ要約したら、出かける時は行き先と帰ってくる時間を教えなさいってことだろ。こんなの子どもしか言われないうて。あつ、っていうかサーニャ」

「うん、少し羨ましいかも。差出人はご両親……バツヘムさんってたしかカールスラント出身でしたよね」

「オラーシヤにいた頃の上官からです。縁あって目をかけて頂いてたんですが、何も言わず出てきてしまったので怒らせたみたいですよ」

バツヘムは手紙を読み進めていく。口語的な書き口は普段の手紙とは大きく違っていた。読み終わるとバツヘムは改めて、頼まず適当に返事すれば良かったと後悔した。

「翻訳ありがとうございます。それと変なものを読ませてしまって申し訳ありません。そろそろ夕食の時間なのでお先に失礼します」

手紙を小さく折り畳み上着のポケットに突っ込むとバツヘムは早速でその場をあとにした。

宮藤が来てからバツヘムが料理をする機会はほとんど無くなった。この日も夕食を作ったのは宮藤だった。彼女の腕前は個人的な因縁により不服そうなクロステルマンを除けば、隊員達は概ね満足と言った腕前だった。

夕食を終えるとバツヘムは真っ直ぐに自室へと戻った。手紙の返事の内容は既に出来上がっていたので、人前で律する必要もなかったためだ。

なれない言語で手紙を書く作業は明け頃まで続き、描き終わる頃には既に水平線の向こうから太陽が姿を見せ始めていた。

二時間くらい寝ようと、ベッドに転んだその瞬間、敵襲の警報が鳴らされた。

のそのそと起き上がり、ハンガーにつく頃には既にほかの隊員は勢揃いしていた。

「遅いー!」

「すみません」

「全員揃ったことだし、監視所からの報告を伝えます。敵、グリッド

東、114地区に侵入。いつもより高度が高いのでフォーメーションを変えます」

ヴィルケが坂本に目配せをすると間髪入れず坂本が出撃メンバーとフォーメーションを発表した。

数人と基地に残ったバツヘムは飛び立つ隊員らを見送ると、直ぐに控え室に向かった。一緒に部屋に入ったユーティライネンは、眠そうなバツヘムを見ると、ポーチからサルミアツキを取り出してバツヘムの口に放り込んだ。

「まつー！」

「まつてなんだよ。寝てたら怒られると思つて食べさせてやったのに。美味しいだろ？」

「……はい」

「あら、随分と仲が良くなったのね」

「そんなんじゃないって」

登場と同時にからかうようなことを言ったヴィルケに、ユーティライネンは頭の後ろで手を組み思い切り背もたれに倒れながら軽口を返した。サルミアツキの独特な味に四苦八苦するバツヘムはようやくそれを飲み込んだ。

「ところでバツヘムさん、手紙はもう書けたの？」

「ええはい、あとは投函するだけです」

「わかつてると思うけど、任務に関する事などは検閲が入るから気をつけてね」

「て言うか今度の手紙には、ちゃんと読める字で書けて書いたの？」

「どういうことかしら？」

「それがさあミーナ中佐、昨日バツヘムのやつ、手紙が読めないってサーニヤに翻訳頼みに来たんだよ」

「相当怒らせてたみたいで、それはもう見事なオラーシヤ文字の羅列で読めませんでした」

「これに懲りたらちゃんと返す事ね」

「はい、ご迷惑おかけしました」

そろそろかと時計を確認したバツヘムの予想とは反して、再度敵襲警報が鳴り響いた。それと同時に管制から内線電話がヴィルケを呼びたてる。短く言葉を交わしたヴィルケは先程までの柔和な表情を一変させ状況の説明を始めた。

「坂本少佐らが落としたネウロイが陽動であることが判明しました。出られるのは私たち3人だけ……サーニヤさんは？」

「夜間哨戒で魔力を使い果たしてる。無理だな」

「仕方ありません、では三人で——」

「私も行きます！」

「先に出撃準備をしてきます」

バツヘムは何事も無かったように言うのと、宮藤の横を通り過ぎハンガーに逆戻りした。彼がユニットを装着し終える頃、宮藤とビショップを連れたヴィルケとユートイラインがハンガーに到着した。

「本気ですか？」

「本気よ」

「私たち、足を引つ張らないように頑張ります」

宮藤がビショップの手を握りながらバツヘムの前に躍り出た。既にエンジンを始動させ宙に浮いているバツヘムは宮藤よりもずっと高い所から威圧的に睨む。怖気付く様子は見えなかった。

「私は自分の身を守るので限界なので、いざと言う時の助けは期待しないてください」

「はいー」

「お喋りはそこまでよ。隊列は私とエイラさんとバツヘムさんが前衛、宮藤さんとリーネさんには後衛を担当してもらおう」

基地を発った五人のうち宮藤とビショップはある程度の距離で後方支援のために待機し、先行する三人は向かってくるネウロイを補足するなり攻撃を仕掛けた。しかしそのどれもが通常よりもかなり早いネウロイには有効打にはならない。

一撃離脱ではダメージを与えられないと悟ると、三人は速度を合わせ攻撃を仕掛けたその刹那、ネウロイは体の一部を切り離し予想を遥かに超える加速で三人を置き去りにした。

どうにかバツヘムが追いつがるも、速度に魔法力を裂き過ぎて攻撃どころではなかった。加えてビショップが撃った流れ弾を回避したため、ネウロイはバツヘムの射程距離を完全脱した。

「クソが」

体を引き起こし毒づく、それが仇となった。

ネウロイが上方へ回避すると、その影で見えなかった弾丸がバツヘムのユニットに直撃した。

バツヘムが水面できり揉みしながら跳ねる様子を目撃してしまったヴィルケとユーティライネンは対極的な反応を見せながら、浮かんできたバツヘムに近づいた。

「あんなに海面で跳ねる奴初めて見た」

「笑ってあげたら可哀想よ」

「いや、でもミーナ隊長も見ただろ、水切りみたいにポンポン跳ねて」
バツヘムに異常が無さそうだとわかると、結局二人とも同じように笑った。

その後しばらく、ビショップの撃墜はバツヘムをからかう種として扱われるのだった。

第四・五話

「あー、完全に電源オフってるな」

「えっ？」

昼下がりのミーティングルームにて、困り果てていた宮藤にイエーガーが遠巻きに言った。二人の視線の先には縦に折れた新聞を持ってどこかを一心に見つめるバツヘムの姿があった。

椅子から立ち上がり、バツヘムの頭に手を置くと、少し乱暴に頭を前後左右へ揺さぶり始める。バツヘムの頭はイエーガーから加えられる力に全く抵抗する素振りを見せず、イエーガーが右と思えば右、左と思えば左へ行った。

「普段ユニヴェルは絶対に触らせないけど、こんなふうに電源がオフになってるとある程度なすがままになる」

「そうなんですか。ビックリしましたよ、無表情で床を眺めてるから体調でも悪いのかと」

「そんなことないから安心しろって、警報がなるか夕方になつたら元に戻るよ。気になるんだつたらシートでもかけてやってくれ」

「バツヘムさんはいる——けど、まさか？」

ストライカーユニットの発注書を片手にやってきたヴィルケは、バツヘムの姿を見るなり真顔になった。早足で歩み寄り、頬を数度突っついて確信すると、膝から崩れ落ちた。

「ユニヴェルに何か用ですか中佐」

「シャーリーさん……ええ、ようやく新しいストライカーユニットのお金が下りたから彼に希望を取りに来ただけのだけど、まさか今日に限って」

「前と一緒にダメなんですか？」

「これまで使っていた機体はどちらかと言うと夜間戦闘向きのBf110だったから、これを機に昼戦闘に向いているBf109かFw190に履き替えてもらおうつもりだったの」

あまり兵器に詳しくない宮藤はついていけず、話の途中でシートを取りに医務室へと向かった。

「まあ機体は本人の好みもあるので勝手には決められないですもんね」
「そうなの、だから話をしに来たのに……起きて、起きなさいバツヘム
曹長！」

「いっ………たい」

ヴィルケが少し強めに頬を叩くと、バツヘムの目に生気が戻るも、
一瞬で消え失せ元に戻った。続けて二発浴びせるも、今度はなんの反
応も見せなかった。

諦めかけていたヴィルケと場所を入れ替わったイエーガーは、バツ
ヘムの右手を掴みあげると手袋に手をかけた。その瞬間、イエーガー
の手はバチツと乾いた音を立てて弾かれた。

バツヘムが先程までどれだけ叩かれても無反応だった者とは思え
ないような機敏な反応を見せたのだ。

「お前が寝てて起きないから起こそうと思って」

目で抗議するバツヘムにイエーガーが手を摩りながら弁明する。

「すみませんでした」

「あれ、起きたんですか？」

宮藤は抱えたシーツをどうしたものかと、困った顔をした。それを
イエーガーが受け取り、バツヘムに投げつけると、その足で宮藤と部
屋を後にした。

「ユニットがなくて飛べないし、他の訓練もないからある程度ぼさつ
とするのも仕方ないけど、人の話も聞こえないのはどうかと思うわ
よ」

「申し訳ありません」

「まあいいわ。それより新しいストライカーユニットの事なのだけ
ど、これを機に履き替えてみるのはどうかしら？」

「前と同じものをお願いします」

「そう言うと思った。今更履き替えて欲しい理由を説明する必要も無
いでしょうから、お願いだけするわ。これ、書き終わったら私のとこ
ろまで持ってきて」

ヴィルケが出ていったのを確認すると、バツヘムは書類を机に投げ
出して乱暴にソファーに横たわった。シーツを被ると背もたれ側に

顔を向け大きくため息をついた。

約三十分経過した頃、リトヴヤクが少し眠たげに姿を現した。リトヴヤクは興味本位でバッヘムの顔を覗き込むと、バツチリと目が合つて仰け反ってしまった。

「何か用ですか？」

「いやっ、違います」

「……そうですか」

バツヘムは体を起こして伸びをすると、白紙の書類を手に取り、忌々しげに睨みつけた。そんな様子が以前、手紙を持ってきた彼を思い出させたためか、リトヴヤクは少し面白くてちいさく笑った。

「そういえばこんな時間に起きてるなんて珍しいですね」

「エイラが、最近休んでないだろって、夜間哨戒を代ってくれたので」

「ああそういう」

「……前からお聞きしたかったですけどいいですか？」

「なんですか？」

「どうして夜間哨戒に行きたがるんですか？」

「夜間飛行が好きだからです。リトヴヤク中尉はお嫌いですか？」

リトヴヤクは食い気味に否定した。しかし二の句がなかなか出でこず、うつむき加減で誰が見ても困ってますと感ずるようなオーラを発している。

バツヘムは次の言葉を書類を作りながら待った。機体に関しては決めかねているが、その他のところは埋められるので、先にそれを埋めてしまう算段だ。

「どっどっしたら皆さんと生活リズムが違っても親しくなれますか？」

「知りません。私が夜間専従だった時はそんなこと考えたこともありませんので」

バツヘムは溜息を吐くと、注文品の欄にB f 1 0 9と書き込んだ。なるべく同じ装備で揃えた方が良い事と、これからは昼の戦闘が多いこと、より向いた性能で得られる安全から元々使っていた機材を諦めた。

「そもそも私はこれまで友人なんていた事がありません。もし先日の手紙のことを仰ってるのであれば勘違いです。あれは……嫌がらせとかに類するものですから」

「あんなに心配してもらってるのに嫌がらせなの？」

「嫌がらせは言い過ぎでした。けどリトヴァク中尉が思うほど良いものではありません。そういう訳なので申し訳ありません」

バツヘムが完成した書類を片手に部屋から出ようとしたその時、リトヴァクが袖を掴んで引き止めた。

「まだ何か？」

「一緒に頑張ろうね」

「はあ……はい。では私はこれを出しに行くので」

「うん、またね」

腑に落ちないバツヘムだったが、分からない物は分からないと切り捨てて執務室を訪れた。

「ええ問題ないわね、受け取ったわ」

「ではこれで」

「その前に、どうして履き替える気になったか教えてくれないかしら？」

「いや……」

満足気にサインをするヴィルケの質問に一瞬口を濁そうとしたが、相手が上官だということを思い出して思いとどまった。

「ここにはリトヴァク中尉がいらっしやるので、私が意地を張る必要は無いと判断しました」

「無理矢理でごめんなさい」

「軍人ですので慣れてます。ではこれで」

「ご苦労さま」

数日後、届いた機材を見たバツヘムが本格的に昼に転向した実感が湧いてきたために心底落ち込む姿が確認された。

第五話

ジトツと湿った服が肌に張り付く不快感と、意思に反して暴れる鼓動が苦しさに目を覚ました。時刻はまだ夜明け前だった。

バツヘムは体を起こして深呼吸を数度繰り返しながら見ていた夢を思い出さないように努めた。五分ほど蹲って落ち着くのを待ったら今度は残った不快感を取り去るために男性宿舍へシャワーを浴びに向かった。その道中、自主訓練中の坂本と鉢合わせた。

「おはようございます」

「ああおはよう。どうした、顔色が悪いぞ」

「いいえ。夢見が悪くて寝汗がすごかったのでシャワーを浴びに行くところですよ」

「そうか、それは災難だったな。というかバツヘムも悪夢を見たりするんだな」

「ええまあ人並みには。というか、少佐達の間では私はどんな人間と思われてるのですか？」

「良い奴だと思ってるよ。ただまあ時々無機質なところがあるかな」

「そうですか……とりあえず急ぐのでこれで失礼します」

「ああまた後でな」

坂本と別れ手早くシャワーを済ませたバツヘムは、今度は風呂上がりの熱気が服の中に籠もる暑苦しさに苛まれた。

元々着ていた服を自室の洗濯物入れにしまい込み食堂へ向かった。既に朝食はあらかた完成しており、来た者からそれぞれ席について食べ始めていた。

「おはようございますバツヘムさん」

「おはようございます宮藤さん」

「あの、バツヘム曹長ってたしかカウハバに務めてましたよね？」

「ええ、はい」

その瞬間、宮藤とビショップの目が期待で輝いた。

「カウハバ基地が迷子になった子供のために出動したらいいんですけど、バツヘムさんはそういう所で戦っていたんですね！」

「あなた方は何故それを私に？」

「バツヘム曹長が昔いた基地なら、どんな人が居たか教えて貰えないかなと思って」

「私がいたのは何年も昔です。その頃のウィッチは順当に行けばほとんど上がりを迎えてるのでなんとも言えません。それに私はあまり現場にいませんでしたので。ご期待に添えず申し訳ありません」

話を早く切り上げようと捲し立てるように述べると、何かを思い出したのか暗い顔をした。宮藤はそれをメニューのせいだと思い、嫌いなものがあつたか尋ねるも、バツヘムはそれを否定した。

料理の乗ったトレイを持ち、ヴィルケの隣に座ると手を合わせ小さく数言呟いてから食事を始めた。普段はしないその所作をヴィルケは意外そうに見つつも、それを口にするには無かった。

「どうしたのトゥルーデ、浮かない顔で」

「食欲もなさそう」

「……そんなことは無い」

「おかわりー！」

「うるせえな」

隣に座っているヴィルケに聞こえるか聞こえないかという声量で小さく呟いた。手早く料理を食べると、食べ始めと同じような所作を取って食事を済ませた。

食堂を出た足でそのままハンガーへゆくと、新しく来たユニットを忌々しげに睨み付ける。

整備員の報告では、機体にはなんの問題もなく、また今しがた行つたバツヘム自身の点検でもやはり故障は見受けられなかった。

「機体じゃないなら俺の故障か」

つま先の方に洗い残した黄色い塗料は、バツヘムに一昨日の模擬戦を思い出させた。

ここへ来た時と同様にクロスステルマンと組んで模擬戦を行ったところ、結果は一回目とは真反対に終わった。一度目の撃墜を取られてからは普段の基本に忠実な飛び方は姿を消し、精細さを欠く飛行が目立った。

その後の点検では異常が見られなかったため、バツヘムの不調と結論づけられた。

ユニットを身につけると動悸が早まり、呼吸が荒くなる。暑く感じるのに背筋は冷たく、不自然に流れる汗がそれを助長した。

「何をしてるんだバツヘム」

「坂本少佐、少し付けていただけです」

「お前に限ってないとは思いますが、無断での発進は無許可離隊と取られかねない。気を付けろ」

「はい、すみません」

「今朝に増して顔色が悪いが、何かあったのか？」

「分かりません」

「分からないってことは無いだろ、お前のことだぞ」

「ですがどうすれば良いかは分かりません。ヴィルケ中佐にお願いしても飛行許可が降りませんでした。少佐、お願いします」

「ダメだ。ミーナにも考えがあつての事だろうし、階級的にもミーナの方が上だ。ならミーナの出した判断に従うのが筋だろう。分かったらさっさと降りろ」

「……了解」

「だがまあ掛け合うくらいはしよう。お前に頼られるのは初めてだからな」

「ありがとうございます」

バツヘムが発動機から降りるのと時を同じくしてバルクホルンがハンガーへとやって来た。

飛行予定のないバツヘムが発動機に登っていたことを不審に思いつつも、傍らにいた坂本を見て気にしないことにした。

坂本はバツヘムを連れて執務室の方へと歩を進めるも、執務室に辿り着くよりも早くその道中でヴィルケを見つけた。

オペラグラスをとおして不安そうに空を見上げる様子につられて坂本も空を見上げると、そこには明らかに調子のおかしいバルクホルンと平常運転なハルトマンの姿があった。

「二人も同時に不調とはな」

「ええそうね。トウルーデもバツヘムさんも重要な戦力なだけに不安だわ。トウルーデはどうも宮藤さんが来てからみたいだし」

「バルクホルンのこともあるが、ミーナ、どうしてバツヘムに飛行許可を出してやらないんだ？」

「珍しい組み合わせだからまさかとは思ったけど……バツヘム曹長には原因究明を命じたはずですが、そちらどうなったのかしら」

「私の精神的なものによると結論付けました」

「根拠は？」

「ほかの可能性が全てありえず、これだけが否定できないためです」
「ブリタニアの探偵みたいなお話を言うのね」

剣呑な雰囲気近くでシーツを干していた宮藤とビショップが不安げに二人の方を見ていた。それに気づいた坂本は次の指示を出し、ひとまず行方を見守ることに決めた。

「マシントラブルではありません。整備員による人為的なものでもありません。気候的問題は同時に飛んでいたクロスステルマン中尉によつて否定されます。健康面に関しては昨日の健康診断で異常がなかったため否定されます。他に可能性があるとしたら私の精神的なものです」

「だとして、精神的に問題のある人を空にあげるとでも？」

「私は以前精神的な問題を抱えていましたが、ヴィルケ中佐はそれを承知で作戦に組み込んでいたことを覚えています」

「隠せていたあの時と隠せない今では問題の質が明らかに違うわ」

「結局あの問題も向き合い続けて解決しました。今度も同じです」

「二人とも少し落ち着け！」

語調や語彙、表情は平時と変わらないものの、そこには現れない憤りを察した坂本は、これ以上盛り上がる前に二人を制した。二人から同時に見つめられ一瞬たじろぐも、まずはバツヘムに口を慎むよう促し、次にヴィルケの方へと向き直った。

「分かりました。あなたがそこまで言うなら一週間猶予をあげるわ」

「一週間でどうにかなるような問題じゃないだろ」

「どうにかしてみせます」

「坂本少佐もそれでいいかしら？」

「まあ二人がそれで納得出来るなら構わんが、話を聞いてると深刻な問題なんだろう？ どうするつもりなんだ」

「慣れるまで飛び続けます。前もそうでした」

「ふん、もう好きになさい。一週間後の朝一番で模擬戦での試験を行います。坂本少佐、相手をお願いできるかしら」

「分かった」

「飛行訓練については通例通り申請を受ければ時間外訓練の許可も出しますが、特例は一切認めません」

「無理を言つてすみませんでした。ありがとうございます」

バツヘムが深く頭を下げて陳謝をすると、ヴィルケは大きくため息をついてその場をあとにした。訓練の監督者には一部始終を知ってるからと、坂本が名乗りを上げた。

時間外訓練の申請書作成のためにバツヘムも坂本と別れ自室へと戻った。それほど時間のかかる書類でもないため、同日の午後前には訓練が始まった。

今朝のようにバツヘムは自身のユニットの簡易点検を行うと発動機を登った。

「滑走路の準備は出来てる、いつでもいいぞ」

先に空へ上がっていた坂本はインカムでバツヘムに離陸許可を出す。

「はい」

とても深く深呼吸をした。額に汗が滲むのを感じるものの体温が無くなったような寒気と、指先の震えが止められずにいた。

魔法力を発現させると、頭から黒と茶色の飾り羽根が生え、尾てい骨の付け根あたりに同じ色の尾羽が生えたことを服に押さえつけられる感覚で察した。

「本当に——」

「いきます」

もはやバツヘムには普段どのようなように装着していたかなど分からなかった。務めて慎重にユニットの装着穴に足を差し込み、よく慣れた

接続の感覚に肩を一度ビクつかせた。

エンジンに魔力を送り込むと唸りを上げ、足元には青い魔法陣が浮かび上がった。爪先のプロペラが丸く残像を残し、離陸をするには十分な回転数にも関わらずバツヘムはなかなか離陸を開始しなかった。なかなか上がってのないうことを不審に思い坂本は再度呼びかけた。

「どうしたんだ、何か問題か?」

「いえ、今行きます」

言葉の端々に少し粗めの吐息が聞き取れた。

数十秒ほどで離陸し合流したバツヘムの様子は蒼白を極めたようなもので、事情を知らなければすぐにも降りしていただろう。

「これはあくまで間も予定外の訓練だ、だからあまり長くは付き合っ
てやれない。辛いだろぅが順序よく行くぞ。まずはどれくらい飛べるか見る、私の僚機に入ってくれ」

「はい」

坂本がホバリング状態から一気に速度をあげると、バツヘムもそれに倣って速度をあげた。機体依存が強い左捻りこみのような機動は避けつつも実戦的で鋭い機動を取る坂本に、少々遅れつつもバツヘムはついて行った。

十五分ほど飛び回ると、再度ホバリングへと戻り、坂本は渋い顔をしながらバツヘムを見つめた。

「良くも悪くもないが、普段のことを考えるとかなり落ちるな」

「多分撃たれたらもっと酷くなります。クロステルマン中尉との模擬戦もそうでしたので」

「エイラのように全て避けるとかそういう問題でもないしな」

「この状態での飛行に慣れれば元に戻るはずです」

「そんなこと出来るのか?」

「戦場で出来ませんなんて言い訳にもなりません。ただやるだけです」

「そうか……そうだな、そうと決まればどんどん行こう!」

バツヘムの訓練は午後にある宮藤とビショップの訓練が始まるまで続いた。

第六話

「あなた宛てに手紙よ」

ヴィルケは言葉と共に新聞を読むバッヘムの脇に三通の封筒を添えた。バッヘムはそれを一瞥すると何事もなかったかのように新聞に目を落とした。

食堂には既に食事を済ませた坂本と、給仕をしていたためこれから食事を取る宮藤だけがいた。

「それと今日はあなたの誕生日だったわね、おめでとう。今年で十六歳ね」

「そうだったのか、それは目出度いな」

「えっ、てつきり年下とばかり……あついや、おめでどうございます！」

「ありがとうございます」

「あなたにも誕生日をちゃんと祝ってくれる友人がいるみたいで少し安心だわ」

「世の中には本人も忘れてるようなことを覚えてる律儀な人もいるみたいですね」

新聞を畳むと手紙の宛名に目を通した。一つはオラーシヤ語、ポクルイーシキンからのものだ。かなり砕けたブリタニア語の手紙の差出人はオヘア、カールスラント語のものはウルスラ・ハルトマンからのもものとなっていた。

「バッヘムさん、夕食のリクエストがあればなんでも作りますよ」

「お祝いしてくれるお気持ちは嬉しいですが、普段通りにしていただいた方がありがたいです」

「でもせっかくの誕生日だし」

「世の中には他人の誕生日をわざわざ憶える律儀な人もいれば、自分の誕生日を喜ばしく思わない人もいますよ。ご馳走様でした、お先に失礼します」

新聞を畳んでテーブルに置くと、宮藤の視線も気にせず食堂を出た。スケジューリング的に自主飛行訓練を組み込めなかったため、バッヘ

ムの機嫌はそこはかたなく悪く、誕生日祝いの手紙はそれに拍車をかけた。

自室への道中でリベリオンからの封筒を開いた。一枚の便箋と同封されていた写真は「私は元気です」と言わんばかりのオヘアの姿が映し出されている。

ウルスラからの封筒には同じように一枚の便箋とてんとう虫の飾りが接着された硬貨が同封されていた。

他の二通よりもサイズが大きく分厚い封筒からは三枚の便箋と一冊の本が封じられていた。便箋の内容はお祝いの言葉、本を同封した理由、提出期限なしの読書感想文提出の言い渡しとなっていた。

「読めたらいいなとは言ったがここまでとは言ってない」

自室の机に放り投げるとベッドに倒れ込み文句を呟いた。十分ほど恨み言を吐くと、諦めたような表情で机に向かい便箋を引つ張り出した。

オヘア向けに半分ほど書き上がる頃、部屋の戸が鳴らされた。

便箋を裏返し立ち上がったその瞬間、バツヘムの側頭部を窓を突破ってきた野球ボールが殴打した。ボールをくらってよろけた先の壁に背中を強打すると、そのままゆっくりと尻もちをついた。

「ぐおお……」

「バツヘムさん大丈夫!?! 開けるわよ」

一連の音を扉の外で聞いていたヴィルケは魔法力を込めて扉を蹴破り部屋に突入した。ヴィルケの目に真っ先に飛び込んできたものは完全に破壊された窓だった。その次に頭を押さえ座り込むバツヘムを見つけると駆け寄った。

「頭を打ったの?」

「俺が何したってんだよもう」

「バツヘムさん?」

「中佐? 鍵はどうやって」

「無理に話さなくてもいいわ。吐き気とか目眩とか何か異常があったら言ってちょうだい」

「ありません」

「まったく誰がこんなことを……はあ、だいたい察しはつくけど」

「ヴィルケ中佐、次の作戦に出していただけませんか」

「それはダメ」

ルツキーニとイエーガーを呼び出すよう管制塔に内線電話を入れ
終えた直後だった。

「単なるワガママということも、部隊を預かるものとしての責任も承
知でお願いします。これ以上私が無能になってしまいう前に、踏ん切り
を付けたいんです」

「なにのよ」

「原隊に戻る決心です。元々私の能力じゃこの部隊でやっていくのに
足りませんでした。でもようやく人に認められたみたいで誇らし
かった。前線は怖いけれど、ちゃんと見て貰えてるみたいで嬉し
かつた。さっさと自分の無能さを証明して甘えるのを辞めるために、こ
んなボールも避けられない程、能力が低いことを証明するチャンス
をください」

まるで計ったかのように敵襲サイレンが鳴り響いた。バツヘムは
ヴィルケと面と向き合い今このタイミングしかないのです」と、確
固たる意思を示した。

「原隊復帰の判断は私に従うことを約束出来るなら出撃を許可しま
す」

「誓います」

「ついてらっしゃい」

「はい」

彼らがブリーフィングルームに最後に到着した。編成と彼らの睨
む容疑者二人に覚悟するよう伝えるとすぐさま出撃へと移った。

団体行動ゆえに落ち着くまで離陸を待つということも無く、クロス
テルマンに続いて空へと上がった。先行する小隊と合流するなり部
隊再編がなされた。

「バツヘムさん、前線に来たからにはちゃんと働いてもらおうよ」

「もちろんです」

「リーネさんもなれない三機編隊で大変かもしれないけど、私の指示

をちゃんと聞いて落ち着いて行動すれば問題ないわ」

「はい！」

「敵発見！」

坂本の号令により戦闘が始まった。

バルクホルン隊が前衛を務め、魔眼でコアを探す坂本隊が後衛に回り、その両隊をバックアップするような形でヴィルケ隊が中衛に入った。

それは戦闘開始からわずか数分のことだった。

それまで全ての敵弾を回避していたバツヘムはなれない三機編成のために回避しきれずシールドで受け止めた直後のこと。被弾した訳でもないのに彼の右足のユニットのエンジンのかかりが急激に悪化し始めた。

「ダメそうなら一人でも離脱してちょうだい」

「……やれます。被弾した訳でもないのに情けないことこの上ないですが、最後までらいきちんと働きます」

リズムが狂ったエンジンを叩いて直すように大量の魔力を流し込むとようやく回転数が安定した。

「なら直ぐにバルクホルン隊の援護に向かうわよ。あの子はいつも視界に二番機を入れてるのに今日は一人で突っ込ますぎる。大事になる前に諫めないと」

「了解——」

「近づきすぎだバルクホルン！」

坂本の怒号が鳴り止むや否や、バルクホルンがいた場所が爆発音と共に火炎に飲み込まれた。

煙の中から逆さまに落ちていくバルクホルンは胸元から血を流し気を失っている。

クロステルマンと宮藤が助けに飛び込む様子をバツヘムは信じられない物を見るような目をして見ていたがそれも束の間、直ぐに部隊再編が行われ、バツヘムは坂本と共に前衛となった。

「もう病気はいいのか？」

「良くはありませんが、不思議と負ける気がしなくなりました」

「それは良かった。バルクホルンのこともある、さっさと決着をつけるぞ。ついてこい！」

「了解」

これまでの不調が嘘であるかのように調子を取り戻したバツヘムは、ついに行くので精一杯だった坂本に対しても難なく追従し、ついにはコアを発見せしめた。

コアを破壊せんと飛び込もうとする坂本らの耳にけたたましい雄叫びの声と銃声が届いた。直後に撃墜されたはずのバルクホルンがネウロイを撃墜すると、バツヘムはいよいよ何が何だかわからないと言った様子で坂本の方を見た。

「宮藤の治癒魔法だろう」

「瀕死の人間を即座に戦闘復帰させられるとかふざけた能力してますね」

「そのおかげでバルクホルンが助かったんだ。それにこれから私たちだって世話になるかもしれない、頼もしいじゃないか」

「……そうですね。では彼女らを迎えに——」

突如としてバツヘムの右足のユニットが黒煙を吹き上げた。

「迎えをお待ちしてます」

クロスステルマンらと同じ場所に不時着してから数時間、回収されたバツヘムは当初の予定通り転属願を司令室の机に置いていた。ヴィルケは窓ガラスの件で犯人だったルツキーニと話をしていて到着が遅れている。

三十分程でヴィルケはやってくるなり、机の上の転属願を破り捨てて、処遇を伝えた。

「あなたのような人を他所へやったら私たちの沽券に関わるわ」

「私はこの短期間で二機も壊しているような兵士ですよ」

「ええそうね。一度目は仕方ないとして二度目は明らかにあなたの扱い方が原因だから処罰は受けてもらうことになるわ」

「と言いますと?」

「階級はそのまま明日から二週間の基地内清掃を命じます。異論は?」

「いいえ」

「それと来週の坂本少佐との実弾演習だけど、ユニットがないのなら当然不可能なので予定を変更します。代わりにあなたの取っておきの料理を振舞ってちょうだい」

「……了解」

バツヘムは眉に皺が寄るのを我慢したせいで変な顔になり、ヴィルケは思わず吹き出してしまった。

「それと最後に、あなた自身はどう思ってるかは知らないけど、私はあなたが無能な兵士だなんて全く思っていないわ」

「ありがとうございます」

「精鋭と呼ばれて誇らしいのも、認めてもらえて嬉しいのも普通のこと。あなたの短所は神経質に考えすぎるところね」

「きつ肝に銘じておきます」

「それはそうときっきの飛行中、急に動きが良くなったけど何かあったのかしら」

「誰かが撃ち落とされても、我先に飛び込んでいける人がいると知ったら不思議と普段通り動きました」

「それだけ?」

「はい」

「とにかく良くなったようで何よりだわ」

「多分治ってはないですけど、まあ前よりは」

あつけらかんとするバツヘムにヴィルケは呆れるしかなかった。

第七話

「またむせてるのか」

テラスへと続く石段の踊り場で煙を吸っては派手にむせるバツヘムを見て、バルクホルンが呆れ気味に言った。

このような光景を501隊の隊員は度々目撃している。反応は概ねバルクホルンと同じ呆れか、そうでなければ疑問符を浮かべる。

「ええはい。それで何か私に用ですか？」

「ミーナから話がある。中に入ってくれ」

「わざわざすみません」

タバコを灰皿で押し潰しバルクホルンの後に続いてミーティングルームに入った。そこには既にイエーガーとルツキーニを除く全員が揃っていた。ソファアが埋まっているのを確認するとバツヘムはピアノ椅子に腰を下ろした。

「とりあえずここにいる人に明日の予定を伝えておきます。明日はヒトマルマルマル時より東側の海に行きます」

「海!? やったー!」

「芳佳ちゃん、訓練だよ?」

「えっ訓練?」

「そうだ宮藤。海上に不時着した時のための訓練をしに行くんだ」

「なんだあ」

「訓練が嫌なのか?」

「いついえ違います!」

「とにかく各自準備をしてここに集合よ。それとバツヘムさんだけど、あなたも参加してもらえるかしら?」

一喜一憂する宮藤を後目にヴィルケはバツヘムに尋ねた。それに伴って隊員の視線が一点に注がれるも、各々察したように視線を外した。

「皆さんがよろしければ参加します」

「それについては既に了承済みよ。みんなそうよね?」

「あなたに見られたところでなんとも思いませんもの」

「そうそう。全く身の危険を感じないよな」

「少し恥ずかしいけど、うん」

ヴェルケに合わせて何人かが口々に同意する。本当かと問いかけるようにビショッップの方を見ると、うつむき加減ながら頷いていた。自身が全く男として見られていないことにげんなりしつつも参加の意志を伝えた。

「でもまあ水着とかにはなりませんけど」

「じゃあその格好のまま泳ぐの？」

「さすがに上着は脱ぎますが、はい」

「分かりました、では明日の所定の時刻にここに集合してください。宮藤さん、シャーリーさんとルツキーニさんに伝言をお願いしますわね」

「はい！」

「では解散！」

解散の号令に隊員達散っていく。バッヘムが自室へ戻ろうと立ち上がったところに坂本が「お前は来ないと思ってた」と話しかけた。返事をするよりも先に坂本は続ける。

「だからお前用のメニューも考えておいたのだが無駄になったな」

「すみません」

「そういう意味じゃないから気にしなくていい。というか私はむしろ安心したんだ」

「はあ」

「お前はチームと個人、どっちで動いていいと言われたら迷わず個人を選ぶタイプだろ。だから今回も一人で基地に残ると思っていた」

「水練は重要ですので」

「そうか、そこまで言うなら宮藤たちと同じ訓練に参加してもらおう。すぐに手配してくるから楽しみにしておけ！」

「待って待って……行っちゃったよ、そんなこと一言も言っていないだろ」

バッヘムは廊下を駆け足で遠のいていく坂本の背中を文句を二三言垂れて頂垂れた。さらにその背中をユーティライネンが「残念だっ

たな」と言わんばかりに叩いて通り過ぎていった。

翌日の十時半頃。ブリタニアにしては珍しい快晴の日、基地東側にある浜辺から少し逸れた岩場で、バツヘムは新兵二人と同様に訓練用ストライカーを履いて項垂れていた。

「じゃあ上着は預かっててあげるわ」

「どうぞ」

暗緑色の上着は日光に晒されて熱を帯びている。上着を脱ぐことで頭になった拳銃は外すがグルカナ이프は外さない。

「ナイフなんて持ってたのか」

「少佐も刀持ってますよね」

「これは制服の一つだ」

「いつ遭難するか分からない仕事ですからナイフは必携だと思いで。私の準備は終わりました」

「よし、お前たちも飛び込む覚悟は出来たか？」

「ほっ本当に飛び込むんですか？ これを付けて？」

「当たり前だろ。これは海上に不時着した時のための訓練だからな」

「でっでも——」

「つべこべ言わず飛び込め！」

怒号に押されるように飛び込だ二人の上に飛んでしまわないよう、少し後から飛び込んだ。バツヘムが水中で目を開けると心配になるほどもがいて沈む宮藤とビショップの姿があったが、ほとんど手の力で浮上しないといけないので見捨てて浮上した。

勢いよく水面から顔を出したバツヘムは大きく呼吸を繰り返した。

「さすがに上手ね」

「ええまあ……二人は大丈夫なんですか？」

実際に溺れる様を見てきたバツヘムは深刻な顔で尋ねた。ヴィルケの隣で時計を持つ坂本が限界を悟り飛び込もうとしたその瞬間、二人がもがきながらやっとの思いで浮上した。

バシャバシャと騒がしく犬掻きをする様に坂本が苦言を漏らすも、溺れ掛けの二人はそれどころでは無い。まもなく力尽きて沈むさなか、宮藤がバツヘムの足を掴んだことでバツヘムまで沈み始めた。

完全に沈み切る直前、バツヘムの手の平から青い魔法陣が現れた。水面をしつかり掴むと、プールから上がるように体を持ち上げた。

「はあ、今助けるから少し待ってろ」

坂本が飛び込んでようやく事なきを得るも、訓練は続いた。

坂本が宮藤とビショップに泳ぎ方を教える隣でバツヘムはミーナから徹底的に扱かれた。足がほとんど使えないのに重りを持って立ち泳ぎや、終わる間際にはヴィルケを背中に乗せて浜辺まで泳ぐなどを行った。

その一部始終を浜辺に座って見ていたユーティライネンは、ミーナが岩場に戻るやいなや「無茶させるよなあ」と、波打ち際に倒れるバツヘムに同情の言葉をかけた。

「昔からです。昔から私の訓練は他の方よりも幾らかきついものなんです」

「どうして?」

「本当にやっちゃうからだろ」

リトヴァクの問いかけにユーティライネンが答える。バツヘムもそれを肯定した。バツヘムは実際にそういった旨の話を耳にしているので否定できなかった。

「本当に悪い癖です」

「それはそうとき、お前本当になんとも思わないんだな」

「はい?」

「ミーナ中佐とかリーネとかの水着姿見てるのに普段と全く変わらな
いから……まさかお前そつちなのか?」

「違います。というか私が何年この世界ですごしてるとお思いですか、裸見たってなんともならない自信があります」

「それはそれでどうかと思うぞ」

「可哀想」

「別に可哀想……敵襲!」

太陽を横切る影を見つけるやいなや魔導針を出して飛行物体の正体を確かめた。ネウロイ特有のノイズを確認すると一目散にハンガーへと走り出した。

ハンガーに到着すると既にイエーガーが離陸準備を済ませ今にも出撃するところだった。

「中尉、敵機はかなり早いです。先に出てください、私もできる限り急ぎます」

「おうー！」

唸りを上げて急加速するイエーガーを見送ると、バツヘムも届いたばかりのBf110を履いて空へとあがった。

先行するイエーガーに追いつくためスピードを上げていく中、無線機から坂本の声が鳴った。

「バツヘム、聞こえるか？」

「良好です」

「今空に上がっているのはお前とシャーリー、宮藤とリーネだ。シャーリーには先行してもらった、お前は後ろの宮藤、リーネと合流して急いでくれ。長機はお前だ」

「了解、合流します」

「頼んだぞ」

「了解。宮藤さん、ビショップさん、話は聞いてましたね。スピードを落として待っているので急いでください」

「はいー！」

十数秒後、合流を果たすとビショップを二番機、宮藤を三番機としたデルタ編隊で速度を上げてイエーガーを追いかけた。

途中衝撃波に見舞われながらもようやく追いついた時にはもうネウロイが砕け散っていた。

「敵機撃墜確認」

「シャーリーは大丈夫か？」

「煙で姿が確認できません。魔導針にはストライカーの反応があるので恐らくは大丈夫かと」

「そうか、ひとまずご苦労だったな」

「あつ、今煙から出て——宮藤ビショップ、急いで確保！」

「どうした何があった！」

「確保出来つてえええええ！」

「どうしたんだ、状況を説明しろ！」

「今確認します」

水面ギリギリでイエーガーを抱える二人の慌てようから緊急事態と察したバツヘムは、ビショップが止めるよりも早くイエーガーの元へと駆け寄った。

「なっ、なんで服を。いや、それよりも怪我は？」

踵を返して尋ねた。

「怪我はありません」

「そうか。はあ、とりあえずこれを着せておいてください」

諦めたようにため息を吐いてバツヘムは自分の来ていたワイシャツを脱いで軽く絞ると、丸めて後ろ向きに投げ渡した。サイズは小さく湿っているが裸よりましだろうという判断だ。

「坂本少佐、イエーガー中尉の無事を確認しました。あとなにか着るものを用意しておいて下さい」

「何を言ってるんだ？」

「中尉が何故か裸です」

無線の向こうでわく声に顔を顰めながら僚機の二人と裸のイエーガーを連れて帰投した。

帰投後、バツヘムはユーティライネンにからかわれまくった。

第八話

バツヘムはユンカースの座席に横たわり暗い天井を焦点の定まらない目で見ていた。向かいの座席には上官であるヴィルケと坂本、また手本となるべき宮藤がいるにも関わらず、一シートを占領して寝ているのは、この五日間で魔法力も体力も気力も使い果たして座ることすらままならないためだった。

その理由を知るヴィルケと坂本は、二人が聞いてきた話も合わせてますます機嫌が悪くなった。

「やめましょう、宮藤さんが可哀想だわ」

「呼び出されたと思っただけなら予算削減の話がされた上に部下をこんなにされたら誰だつて不機嫌になる」

「まあそうだけど……バツヘムさん、少しは良くなったかしら？」

「もう二度とやりたくない」

「バツヘムさんは向こうで五日間も何してたんですか？」

「守秘義務が課せられたので言えません。知りたければ本部基地を爆撃してください」

「滅多のことは言うものじゃない。宮藤にも悪いことをしたな、せつかくだからブリタニアの街を見せてやろうと思っただけ」

「いえ。軍にもいろんな人がいるんだなって」

窓の外を見る宮藤は機体のスピーカーから聞こえてくる少女の歌声に気づくと、それを坂本に尋ねた。

「これはサーニヤの唄だ。基地に近づいたな」

「迎えに来てくれたのよ」

「へえ、ありがとう」

機外のリトヴァクと目が合った宮藤はお礼と共に手を振った。リトヴァクは困ったような顔で雲中へと姿を隠した。その直後リトヴァクの唄声が途切れ、変わりに敵がいると報せる声が無線機から鳴った。

ヴィルケが援軍到着までの時間稼ぎを命じると、高く高度をとったリトヴァクが戦闘を開始した。

リトヴヤクのフリーガーハマーが唸りをあげる度に宮藤の焦りが濃くなるものの、ストライカーを持たないため見ていることしか出来なかった。

それを見兼ねたヴィルケがリトヴヤクに絡めてバツヘムの固有魔法も夜間飛行に適したものであることを宮藤に教えた。

「そうなんですか？」

「ええそうよ。彼の固有魔法は弾丸誘導。系統としては念動系と感知系の複合かしら」

「あつ、この前坂本さんに教えて貰った……でも二つも固有魔法を持つなんてあるんですか？」

「魔法はまだまだわかってないところが多くて、分類出来ないが一番正確なの。有名な人だとアフリカのマルセイユ大尉がそうね。彼女の固有魔法は三次元空間把握、未来視、弾道安定の複合したような能力よ」

「じゃあバツヘムさんは何と何の複合なんですか？」

宮藤の気を反らせた事に満足気なヴィルケは、バツヘムの方を一瞥して、彼が話せそうにないことを確認すると、自分で説明することにした。

「曲射と全方位広域探査の二つよ。後者はサーニヤさんと同じだから知ってるわね。曲射はそのまま弾道を曲げる魔法。全方位広域探査で見つけた敵の反応に弾丸が曲がるようにする魔法が彼の固有魔法よ」

「へえ……あれ、でもバツヘムさんが弾を曲げるところなんて見た事ないですよ」

「私も見た事がないな」

「私もよ。曲げて狙うよりも普通に狙った方が早くて強いらしいわ」

「ネウロイが離れていく」
寝転びながら魔導針を明滅させるバツヘムが話に割り込んで呟いた。

「サーニヤが落としたのか？」

「違つうっ！」

えずくと共に魔導針が掻き消えた。

坂本がバツヘムに見切りをつけてリトヴヤクに状況を聞いた。リトヴヤクはバツヘムと同様にネウロイの撤退と、それとは別に反撃してこなかったことを伝えた。基地までの距離も踏まえて部隊全体に撤収の命令が下った。

足の遅いユンカースが基地に到着する頃には、出撃していた面々は既にハンガーでストライカーを履き替えていた。

バツヘムを背負ってユンカースから降りる坂本を見つけたクロステルマンは、反射的にバツヘムを睨むも、見るからに具合の悪そうな様子を見て嫌味までは言わなかった。

「なんで戦ってたサーニャよりぐったりしてんの？」

身体中がら水を滴らせるハルトマンが坂本に聞いた。

「詳しくは知らんが本部で大変な目にあっていたらしい」

「何があつたらそうなるのさ」

「とにかくデブリーフィングはシャワーの後だな。そんな濡れたままでやったら風邪を引いてしまう」

「先にブリーフィングルームに行くので下ろしてください」

「いや、お前は今日はもう休め。ミーナには私から言っておく」

「……了解」

「途中で倒れられでもしたら面倒だからな、部屋まで連れて行ってやろう」

一部始終を見ていたハルトマンがバルクホルンにおんぶをねだるのを横目に、坂本はバツヘムを部屋まで運んだ。

バツヘムをベッドに寝かせると、朝食前に体重を計るように言いつけた。

翌朝、久しぶりの就寝だと言うのにバツヘムは平時通りに目を覚ました。一晚寝て少しは軽くなったが疲労は抜け切らず、ベッドから抜け出するのに普段の二倍の時間を要した。

五日間着続けた服を男性宿舎の洗濯カゴに放り込みシャワーを浴びると、その足で医務室へ向かった。ブリタニア式の体重計にまだよく回らない頭で捻り出した結果に大きくため息をついた。

食堂は朝食のトーストや卵の香ばしい匂いと、ポウルに山盛りのブルーベリーの甘酸っぱい匂いで満ちていた。

バツヘム以外の隊員は勢ぞろいし、料理当番のビショップ以外は既に朝食を食べ始めていた。

「おはようバツヘム、今朝はどうだ？」

「おはようございます坂本少佐。昨日よりは随分と良くなりました」

バツヘムは他の隊員にも挨拶をして席に着いた。

「あまりそうには見えないが……体重は計ったのか？」

「はい」

「あら、そんなことを指示していたのね」

「昨日背負ったら背丈の割に軽くてな。どうだったんだ？」

「六日前から10キロの減量して、今は39キロです」

「なんだと!？」

声を上げて驚いたのは坂本だけだったが、話を聞いていなかったルッキニー以外の隊員も各々で驚きを隠しきれなかった。

「ほんとちゃんとした食事も六日ぶり……美味しい」

少し火が入りすぎたスクランブルエッグ頬張って呟いた。

「おっお前、本当に大丈夫なのか？」

バルクホルン大尉が平然と食事をする様に尚更面食らいながら尋ねた。

「これくらいでどうにかなる私ではありません。経験上、あと二日くらいでこの体調にも慣れます」

「あたしのおかずもやるよ」

「それには及びません。どうせ一人前食べたら満腹ですから」

「いやいいから食つとけて、倒れるぞ」

「倒れませんよこの程度で」

「とにかく食べ終わったら執務室へ来てちょうだい」

「了解しました」

手早く食事を済ませたバツヘムは先に執務室へと向かったヴィルケの後を追って執務室へと急いだ。

執務室ではヴィルケが仕事を始める準備をしていた。バツヘムが

やってくるとその手も止めて、ヴィルケはバツヘムをまじまじと上から下まで見つめた。

基本的に長い丈の服を来ているバツヘムの体格を、ヴィルケは健康診断の結果でしか知らない。先日の上訓練で目にはしたものの、バツヘムと付き合いの長い彼女は、彼がひた隠しにする傷の一つ一つをあまり見ないようと努めてしつかりと見ていない。健康診断でもバツヘムは身長が150数センチな割に体重が少ないと診断されていた。

「立つてるのも辛いでしょうから手短かに伝えるわね。まず今日のはあなたは非番、正確には戦闘待機だけ見張りとかは他の子にしてみらうから事実上の非番よ。それで明日からはサーニヤさん、エイラさん、宮藤さん達と夜間専従班としてシフトを組もうと思っていたのだけど……」

「今朝のことでお悩みになっていたのでしたら、私は問題ありません」「はあ、分かりました。あなたはその為に生き抜きたって宣言したもののね。では明日から夜間専従でお願いします」

「了解しました」

「話は以上よ。とりあえずなんともないみたいだけど、何か異常があれば直ぐに相談するのよ」

「ありがとうございます。失礼します」

用事が済み、部屋へ戻ろうとする道すがら食堂から坂元の独り言がバツヘムの耳に入った。バツヘムは坂本が料理をするところなど見たことがないため、何を作るのか見に台所のカウンターまで歩み寄った。

半切りに盛られた湯気を立ち上らせる炊きたての白米と、坂本が睨む三角形のおにぎりと、おおよそ三角からほど通り米の塊がそこにはあった。

「何してるんですか?」

「おおバツヘム、いつからいたんだ」

「今来ました。それより米の塊に何を語り掛けてるんですか?」

「これはおにぎりと言って扶桑の伝統的な携帯糧だ」

「発酵させる前の生地みたいですね」

「この楕円形のは失敗作、こっちの宮藤が握った三角形のものが成功例だ。お前が司令部に行ってる間に一度練習で沢山握ったのだが、あまり評判が良くなくてな。とりあえず自分で食べれる分だけで練習している。バツヘムはまだ食べたことがなかったら、記念に何個かどうだ?」

「評判悪いものを勧められても……まあ一つだけ」

「お手本を食べられると困るからこっちで我慢してくれ」

「はあ、見た目の割にずっしりしてますね。いただきます」

球形のおにぎりのぎつちりと詰まった感触に面食らったものの、バツヘムは問題なく食べきった。

「どうだ?」

「少し塩辛くはありますが美味しいですよ」

「本当か!？」

「えっええ、別に悪評がつくようなものではないと思いますが」

「そうか、では後は形だけだな。どうせならもつと食べていけ。体重も落ちていたし丁度いいだろう」

「暴食すると動けなくなるので遠慮します」

「むしろ今は食べないと動けないだろ、ほらもう一個、あとは私の昼用だ」

半ば無理矢理手渡されたおにぎりを完食して食堂を後にした。自室に戻ると、お腹の苦しさを我慢して夜間シフトに備えて眠りについた。

第九話

比較的高緯度に位置するブリタニアの日暮れは遅く、その日は午後八時に差し掛かってなお夕暮れのオレンジ色が空を染めていた。夜間シフトになれておらず、また寝ぼけている宮藤はそれが明け方の空ではなく夕暮れだと気づくのに三十秒程を要した。

普段よりも暗い食堂で夕食を済ませると、クロステルマンがテキパキとハーブティーをいれはじめた。

「これは？」

「マリーゴールドのハーブティーですわ。これも目の働きを良くすると言われてますのよ」

宮藤の質問に対する過剰な回答で、今朝のブルーベリーに対抗したことを隊員の誰もが悟つとた。

「あら、それって民間伝承じゃ……」

「失敬な！ これはおばあさまのおばあさまのそのまたおばあさまから伝わるものでしてよ！」

「それを民間伝承って言うんですよ中尉」

クロステルマンの猛反論をバツヘムがバツサリと切り捨てると、それをエイラがニシシと笑った。

それ以上の盛り上がりもなく、各々がハーブティーを肅々と飲むなか、ルツキーニの声がようやく静寂を打ち壊した。

ルツキーニは今朝のブルーベリーの時のように、宮藤とリーネに下を見せるよう強請るも、今朝とは違い青くも赤くもましてやハーブティーと同じ琥珀色にもなっていない舌に「つまんない！」と評した。「ドツチラケ」

「べべ別にウケを狙ったわけではありませんわ！」

部隊の大半が渋い顔をする中、ヴィルケとバツヘムだけは平気な顔で飲み干した。

完全に日が沈み、灯火管制により最低限まで灯りを落とした基地は暗闇に包まれた。分厚い雲が月明かりを遮るので尚更暗い。

そんな中での滑走路の誘導灯は、まるでそれが浮かんでいるような

錯覚を見るものに与えた。慣れているリトビヤク、ユーティライネンはそのような錯覚もすぐに克服したが、夜間飛行初体験の宮藤は一寸先もよく見えない環境に完全に怯えきっていた。

やがてリトビヤクらに手を握ってもらいようやく離陸する様を、ほかの隊員たちはしつかりと見物していた。

その情けない姿に坂本が苦言を漏らす横で、バルクホルンの感動にも取れる言動をバツヘムは聞いてしまい少し距離を開けた。

「私なんて離陸するまでに一週間もかかりました」

無事飛び立った宮藤の姿に最近初めて飛んだビショップは安堵の言葉を漏らした。

「くくく、坂本少佐の前で無様でしたこと」

「本当に時間かけすぎです」

「時間かかったのは半分くらいユニヴェルのせいだからな」

「納得しかねます」

「それと、ペリーヌは人の事言えないよな。お前の時もたいがい酷かったぞ」

「余計なことはおっしやらなくて結構よ！ バツヘムさんも初フライトの時は案外苦戦したんじゃないかしら？」

「誰でも初めては怖いものよ。サーニヤさんと同じ魔法をもつバツヘムさんもなんだかんだで苦戦してたもの。そうよねバツヘムさん」

「ええまあ、飛ぶには飛べましたけど。結局すんなり出来るかどうかは本人の資質じゃなくてその時の状況ですからね。切羽詰まったら怖くて飛べないなんて言ってられません」

「まあ今日はこんなところだろ。私はそろそろ寝よう」

坂本の言葉を皮切りに隊員たちは各々の部屋へと散り始めた。そんな中、バツヘムは「もう少しだけ残る」と言いつた。ヴィルケもそれに同調して、闇の中に二人だけが残った。

バツヘムがタバコを吸う許可を求めると、ヴィルケは少し低い声で健康に悪いとだけ言った。暗闇の中でタバコの火は目立った。

「ゲホツ、クソっ」

「前々から不思議だったのだけど、むせるのにどうして吸うの？」

「まあ、何となく」

「あなたが何となくでタバコなんて吸うわけないわ。依存しているなら辞めた方がいいわよ」

「……ヴィルケ中佐はあまり良い顔をしないかもしれないのであまり言いたくありません」

「そう言われると尚更聞きたくなるわ」

バツヘムは言うか言わないかを考える時間稼ぎにタバコを一吸いするも、先程ではないが苦しそうに息を吐いた。

「私もタバコは嫌いですよ。でもこの銘柄は特別です。自信が湧いてくるんです」

「どういうこと？」

「私にとってこの匂いはスオムスにいた頃に出会った強い人の匂いです。それが近くにあればいつもなんとかなる。おまじないみたいなものです」

「その人は今でも現役なの？」

「さあ、完全に縁が切れましたから。というかその頃の知り合いで今も手紙くれるのはウルストラトリベリオンのカウガールだけで、あとの人たちはもう完璧な他人ですよ順当にいけばすでに上がりを迎えています」

「……なんだかんだで友人がいるみたいで安心だわ。実際に弟がいたらこんな感じなのかしら」

「いやあ、違うかと」

「ふふふつ、確かにあなたは弟つて柄じゃないわね」

タバコを吸い終えるまで雑談をした二人はそれぞれの部屋へと戻った。

翌朝、バツヘムが食堂へ行くと食卓が生臭さに包まれていた。テーブルの上に置かれたお猪口に注がれた透明な液体が発臭源だ。

ゾクゾクと揃う面々が一様に顔を顰めながら席につき、それを睨んだ。クロステルマンはいの一番にその正体を問いただした。

「肝油です。ヤツメウナギの」

漢字で肝油と書かれた一斗缶をかかえながら答えた。

「ビタミンたっぷり目にはいいですよ」

生臭さに苦言を漏らしつつ意を決してそれぞれが換喩を飲み干し、そのマズさに揃って顔を歪めた。

「エンジンオイルにこんなのがあったな」

「……おいバツヘム、なんでサルミアツキ食べさせてやった時より平気そうな顔なんだよ」

「不意打ちでしたので」

「不意打ちじゃなかったらユニヴェルはあれ食えるのか」

「もつと酷いものを知ってますので」

バツヘムの言い草にユーティライネンが抗議したが、それに賛同する人はいなかった。イエーガーは興味本位な顔でバツヘムに尋ねた。「遭難地でのタンパク源といえば相場が決まっています。以前に扶桑の方から、種類は違いますが似たようなものを佃煮とやらにして食べる」と聞きました」

「宮藤の顔でなんとなく想像ついたわ」

「お分かり頂けたようですねによりです」

「ちなみに中佐のは？」

「分かりかねます」

バツヘムとは違った理由で肝油を美味しくいただくヴィルケが、その日の朝食のハイライトだった。

朝食を終えるとバツヘムは夜間シフトに従い自室へと戻った。カーテンを締め切り日除けの呪符を貼ると、軽くストレッチをしてベッドに横たわった。

夕方頃に起床すると、シャワーと夕食を手早く済ませてストライカーや銃の点検を始めた。整備士がきちんと整えているのを前提に要所だけを確認する簡易的なものだ。

「バツヘムさん」

「リトビヤク中尉。お一人ですか？」

背後から話しかけられたバツヘムは、工具を一度置いてリトビヤクの方へ向いた。普段はほとんどの確率で一緒にいるユーティライネンや、ここ数日共にしている宮藤が居ないことに少し意外性を感じつ

つ対応した。

「はい。二人はちよつと悪ふざけが過ぎて坂本少佐に怒られてて」

「あのお二人はここをどこだと思ってるんですかね」

「坂本少佐にも言われてました……」

「それで私に何か御用ですか？」

「用ってほどの事じゃないのだけど……宮藤さんのことどう思いますか？」

「デリカシーを欠く事でも言われましたか」

「違います」

「どうと言われても……ある時は民間の牛舎に墜落して迷惑をかけられ、ある時は海に引きずり込まれて迷惑をかけられてと、あまりいい思い出がありませんからね。偏りますよ」

冗談気味にバツヘムが言うもリトビヤクは真に受けたように深刻な表情になった。

「バツヘムさんは宮藤さんが嫌い」

「冗談ですよ真に受けないでください。ですがまあ、あまりいい印象はありません」

「どうして？」

「宮藤さんが、と言うより宮藤さんのようなタイプの志願者が好きではありません。経済的な問題はなく、さしたる危機もない。要するに軍人になるような人。この部隊だと宮藤さんとイエーガー大尉が当てはまります」

「でもシャーリーさんとは仲良さそう」

「宮藤さんもイエーガー大尉も軍人としては好きではありませんが、人としては目的がハッキリしてる分好感が持てます」

数秒ほど返答を待ち、それがないとバツヘムは点検を再開した。さらに数分が経ち、依然として背後に感じる気配にバツヘムが先に折れた。

「まだ何か用ですか？」

「……バツヘムさんはシャーリーさんが——」

「サーニャー！」

「エツエイラ、急にどうしたの？」

「バツヘムと一緒にいるのが見えたから、まさか虐められてたり」
「してない」

「気をつけるよサーニヤ、男はみんなサーニヤみたいなかわつかつ……狙ってるんだからな！」

「私がここで一度でもそういう素振りを見せましたか？」

「まあまあお二人共落ち着いてください」

現れるなり言いがかりをつけるユーティライネンにバツヘムもすかさず応戦したところ、宮藤が間に割って入って治めた。

「本当にそう言う言いがかりはやめてください」

「……悪かったよ、悪ふざけが過ぎた」

「たつた今悪ふざけを叱ったところだと言うのにお前と来たら」

「しよ少佐あ」

「それよりもバツヘム、今更聞いても仕方ないんだが一応聞いておく。本当に体調は大丈夫なのか？ もし不安が残るようなら予定の変更もできるがどうする」

「必要ありません。軍人になって体調がよかった日の方が少ないですから慣れてます」

「正直私は不安だ」

坂本の意見を余計なお世話とばかりに一蹴するバツヘムに、坂本も顔を顰めて返した。二人の間にそれ以上の会話はなく、数十分後には離陸が開始された。

バツヘムが先陣を切つて離陸すると、他の三人も、先日と同様に手を繋いで彼のストライカーの主翼に付いたライトを追いかけるように空へと駆け上がるのだった。

第十話

雲の上と下では空気も光景も宮藤の様子も文字通り天と地ほどの差があった。

慣れている者でも容易に前後不覚へと陥ってしまう雲の下と、月や星の存在で上下がハッキリし比較的明るい雲の上では飛行難度も段違いだった。

雲の下ではリトヴァクとユーティライネンの手を握りしめて震えていた宮藤も、雲の上に出ると景色に感動し縦横無尽に飛び回る。その変貌ぶりにユーティライネンは呆れたように笑った。

「宮藤さん、気持ちわかりますが落ち着いてください。銃を振り回すように飛ばれると気が気ではありません」

雲の上までは先導して飛んでいたバツヘムは、宮藤が落ち着いたのを見計らって小隊を組み直し、宮藤の長機位置に着いた。

「ほんとうに全然反応違うよな。地上にいた時はあんなにブルブルして怖がってたくせにさ」

ユーティライネンがからかうに言った。

「エイラさんだって初めての時は怖かったはずだよ！」

「そんな昔のことは忘れたな」

「バツヘムさん！」

「私の時は暗闇よりもそれに紛れてるネウロイの方が恐ろしかったです」

「ダメだ、住んでる世界が違いすぎる」

「私は覚えてる……。初めて夜空を飛んだ時は、高く昇れば昇るほど色んなものが見えて、聞こえてすぐくびくびくりしたの」

ようやく出た彼女と同じような感想だったが、宮藤はそれでも自分の見えてるものとは段違いなことを想像すると、その事を素直に口に出してリトヴァクを褒めそやした。褒め言葉に反応し誇らしげにしたのはユーティライネンだった。

続けてリトヴァクは、自分の力がウィッチになって初めて何のためにあるかに気づき、今のストライカーの開発者である宮藤博士には感

謝していると述べた。自分が褒められた訳でもないのに照れている宮藤にユーティライネンがその旨を伝えるとバツヘムは小さく「どの口が」と呟いた。

宮藤は数秒ほど黙り込むと何かを決意したような表情で三人の前に踊り出た。

「あのね、今日は私の誕生日なの」

「……そう」

「おめでとうございます」

「何で黙ってたんだよ！」

三者三様の反応だが、宮藤には少し怒った風なユーティライネンと、興味なさげに祝福するバツヘムは予想の内。ただ一人、目を丸くするリトヴャクの反応だけは彼女にとっても意外なものだった。

「私の誕生日はお父さんの命日でもあるの。だからなんかややこしく言いそびれちゃった。それにバツヘムさんはこういう話は好きじゃなさそうだし」

「バカだなあお前。こういう時は楽しいことを優先にしたっていいんだよ。バツヘムなんか気に使わなくていいんだよ」

「えー、そういうものかな」

「そうだよ」

「あと勘違いされてるみたいですけど、私が嫌なのは自分の誕生日であって他人の誕生日にまでとやかく言いません」

「だってあの時すごく怖かったし」

「バツヘムが怖いって……ないない！」

ユーティライネンが大笑いするなかリトヴャクが宮藤に耳を澄ます様に指示した。直後彼女の魔導針の輝きが変化し、インカムから音楽が流れ始めた。

先程のリトヴャクのように、今度は宮藤が目丸くして驚いた。「ラジオの音だ」

ユーティライネンがリトヴャクの代わりに答える。どことなく不機嫌を孕んだ声色。その声でぶつきらばうにラジオの発信源がその辺ではなく、地球の裏側程の遠くから届いてるのだと、自慢するよう

に言った。

「夜は飛ぶ時はいつも聞いているの」

「地球の裏側から……想像もつかないや」

ユーティライネンがリトヴヤクにこっそりと耳打ちをした。

「二人だけの秘密じゃなかったのかよ」

「ごめんね、今日だけは特別」

不機嫌だったユーティライネンも、リトヴヤクの無邪気な微笑みを見ると気をそがれたように大きな声で「じゃーしょーがないなあ」と叫んだ。

二人のやり取りがよく分からず怖くする宮藤にリトヴヤクが何かを伝えようとしたその最中、リトヴヤクとバツヘムの魔導針にネウロイの反応が現れた。いつの間にかインカムからの音はラジオの代わりにネウロイの音に切り替わっていた。

歪んで歪むその音は通常のランダムなものではなく、その場にいる人や司令室でインカムの通信を聞いていた坂本とヴィルケにとって聞き覚えのあるメロディを歪に奏でている。

「リトヴヤク中尉、撤退です。あいつは明らかにリトヴヤク中尉を狙っています。中尉聞いてますか、中尉……中尉！」

「はっ、みんなは避難して！」

「いやだから——クソが」

顔を青ざめさせたリトヴヤクは我に返ると、有無を言わさぬスピードで上空へと駆けて行った。遅れてバツヘムも上昇を開始するも、彼女の元へたどりよりも早くネウロイのビームが彼女へぶつかった。反応が遅れた二人ではそれを躲すことも防ぎきること出来ず、リトヴヤクだけを狙った光線は彼女の左足のストライカーを壊した。

すぐ下にいたバツヘムはリトヴヤクを抱き抱え昇ってくるユーティライネンらと高度を下げながら合流した。

「サーニヤちゃん！」

「サーニヤ！ バカ！ 一人でどうするつもりなんだよ！」

「敵が狙ってるのは私なの……間違いないわ。私から離れて、一緒にいたら——」

ネウロイの二回目の攻撃を躲し距離を置くと話を再開した。

基地とは連絡が取れず、一面の雲海のどこかには今もリトヴァクを目掛けて高速で接近する敵機が存在する。

そこで彼女ら四人の内に出た二つの案は完璧に割れた。

バッヘムは撤退を提案し、ユーティライネン他は撃墜を指すとした。

「本気ですか？ この面子には今使える人が私とユーティライネン少尉しか居ないんですよ。中尉は片足を失って、宮藤はシールドだけが取り柄の素人。本当に倒せると本気で思ってるんですか？」

「倒せる」

ユーティライネンは続けて言う。

「サーニヤは私に敵の位置を教えてください。大丈夫、私は敵の動きを先読みできるから、やられたりしないよ」

「そのリトヴァク中尉が位置を間違えたらどうするつもりですか。わざわざ危険な手段に出なくても——」

「うっさい、サーニヤは間違えないんだよ。もし間違ってもサーニヤなら文句ない！」

「リトヴァク中尉も同じですか？」

リトヴァクはバッヘムの腕の中で黙りこくった。深刻な顔をするリトヴァクに何か声をかけようと宮藤は言葉を探す素振りを見せるも、見つからずに俯く。

そんな中言葉を発したのはユーティライネンだった。

「あいつはサーニヤじゃない。あいつはひとりぼっちだけど、サーニヤは一人じゃないだろ？ 私たちは絶対に負けないよ」

「リトヴァク中尉、撤退しましょう」

「……ううん。今ここで倒す」

ユーティライネンと宮藤が嬉しそうにリトヴァクの名前を呼んだ。しかしバッヘムはそれでも撤退するべきだと強く彼女に言った。

「上官命令。バッヘムさんは軍人？」

「……分かりましたよ、やはりあなたもウィッチでしたね。宮藤さん、リトヴァク中尉を代わってください」

「えっあつはい！」

指針が固まるとバツヘムはリトヴヤクを宮藤の背中へと移し替えた。その流れでユーティライネンがリトヴヤクのフリーガーハマーを受け取り、戦闘が再開された。

リトヴヤクの指示の下、ユーティライネンが雲の中へフリーガーハマーを撃ち込んだ。少しずつ位置をずらして斉射されたロケット弾は雲を広範囲で吹き飛ばした。

僅かに見えたネウロイはそのスピード落としながらも再度雲へと隠れる間際、バツヘムの射撃が僅かにネウロイの装甲を削った。

ダメージの証拠のようにネウロイの放つビームは的外れな雲を蒸発させる。

高速で接近するネウロイに対してフリーガーハマーを撃ち尽くしたユーティライネンは、使い慣れたMG42を構え発砲した。

四人に肉迫するネウロイから放たれるビームを宮藤のシールドがひたすら防ぎ、その内側で残りの弾丸三人の努力が功を奏し、無事にネウロイを撃破した。

砕け散るネウロイの破片がそれまでの運動エネルギーに任せて遅い来るも、それを防ぎ切ると、先程までの出来事がうそのように静まり、代わりインカムからはリトヴヤクの歌のメロディが鳴り出した。

「これはお父様のピアノ……」

リトヴヤクが飛び立ちゆっくりと上昇する下ではユーティライネンと宮藤が和気藹々とリトヴヤクの誕生日の話で盛り上がっていた。そのどちらにも興味なさげなバツヘムは無線が回復したことを確認して基地と連絡を取っている。

「私だ、坂本だ！ 聞こえるか？」

「こちらバツヘム、良好です」

「やつと繋がった。状況を教えてくれ」

「たった今敵機の撃墜を肉眼で確認、レーダーに他敵反応ありません。出血等の負傷者はいませんが、リトヴヤク中尉が右足のストライカーを吹き飛ばされています。我々だけでも充分連れて帰れるものと推察します」

「そうか」

「すぐ……もう少ししたら帰投を開始しようと思いたしますがいかがでしょうか」

「ああ問題ない、そうだなミーナ」

「ええ良くやってくれたわね。帰ったらデブリーフィングをするから出来るだけまとめておいてちょうだい」

「了解。交信終了します」

基地との交信を打ち切り空を見上げると、月を背景に片足で器用に飛びリトヴヤクが彼の目に映った。彼女自身も僅かに上を向き、目尻に涙を堪えながらも口角をほのかに上げて笑みを浮かべている。魔女と言うよりは妖精やその類のものに思えた。

少しするとユーティライネンと宮藤が迎えに近寄った。帰投の準備をするのだろうと、バツヘムも集合した。

「誕生日おめでとう、サーニヤちゃん」

「あなたもでしょ、芳佳ちゃん」

「えっ？」

「誕生日おめでとな」

「おめでとうございます」

「なんかバツヘムのは嘘くさいな」

「ハイハイ、帰りますよ。中尉、掴まって下さい。それじゃもう飛べないですよね」

バツヘムが右手を差し出した。三人はありえないものを見たように固まるものの、ユーティライネンがいち早く動き出しリトヴヤクを背負った。

「お前は宮藤の手でも握ってるんだな」

「私の手でもってどういう意味」

「じゃあいいです」

「ちよつと二人とも酷い！」

「行きと同様に私が先導しますのでついてきてください」

その後、雲の下をバツヘムの手を握りしめ震えながら飛ぶ宮藤の姿が、緊急発信していた隊員によって確認された。

第十一話

宮藤から見てバツヘムはほかの隊員とは違った理由ですごい人物であった。理由はいろいろあるが決め手はバツヘムがたった数日で体重を数十パーセントもそぎ落としたことだ。彼女にはいったいどんな日々を送ればそんなことになるのか皆目見当もつかないが、それが体にとても悪いことは医療の知識を使うまでもなく分かった。さらにはそれを目撃した翌日には普段通りの生活に復帰しているのだからますますわからない。飛行に關してもバルクホルンのような力強さもハルトマンのような鋭さも及びはしないが、どこまでも理詰めかつ冷静で理性的な飛行は彼女らとは違った凄みを帯びている。着々と劣勢に追い込まれて狙われる感覚が付きまとう飛び方はネウロイとは別種の恐怖を与えるため宮藤は特に苦手と浴ていた。

また家事も万能である。料理は上手だし部屋は常に清潔、勤務日に服装が乱れているところは緊急時を除けば目にしたことがない。501の面々は彼女からして、どうすればそうなるのかと思わせるものぞろいではあるが、バツヘムは特に宮藤にそう思わせる存在だった。

「宮藤がこんなになるなんて久しぶりだな」

「シャリーさん……今日の訓練、バツヘムさんとだったんです」

「あーあいつは体力馬鹿だから。この間のでだいぶ消耗したみたいだけど戻ったみたいで安心したよ」

「ほんとすごいです」

「確かここに来たばつつかの時も三時間くらいダッシュユさせられてたな。わけわかんないだろ」

「三時間……」

「それに宮藤だつてよくやってるよ、来た時に比べたらずいぶんたくましく育ったじゃないか。まあここ以外だけど」

イエーガーはいたずらっぽく笑い宮藤の胸を一突きすると、見せつけるように胸を張り高笑いしながら食堂を出た。胸を抑えていた宮藤も一度ため息をつくときを取り直して夕食の準備を再開した。件のバツヘムはというと、失った体力を作り直すためのトレーニング後

のシャワーを浴び終えたばかりだった。

訓練を終え残すところは消灯時間までの便宜上の待機という名の自由時間。バツヘムはようやく最終章まで読み進めたオラーシヤの本を片手にミーティングルームのソファアに腰かけていた。明確な趣味を持たない隊員は待機時間中、存外暇を持って余すことが多い。

「相変わらず難しい顔をして本を読んでいるな」

同様に暇を持って余したバルクホルンは、部屋にバツヘムを見つけると話しかけた。普段はあまり会話をすることがないためぎこちなさがある第一声にバツヘムは返答に困ったのか「あっはい」とだけしか返事ができなかった。お互い見つめあったまま無言の時間が数秒が流れるとバルクホルンははじかれたように顔を背け少し離れたところに座った。

「そっそんなに難しい本なのか？」

「いえ、いや、内容はそれなりに複雑ですけどそれ以上にオラーシヤ語を読むのが大変でして」

「そういえば前はオラーシヤにいたと言ってたな」

「はい。向こうの上官に習ってある程度の読み書きと会話はできるようになったんですが、やはり母語に比べると難しいです」

「そうか……」

再度立ち込める沈黙に先にあきらめたのはバツヘムの方だった。先ほどまでは何か用事があるのかと手を止めていたが、何もないと見るや否や再び読書を再開した。

彼女たちの初対面はバツヘムとヴィルケの初対面の時期と大きくに変わらないものの、その当時は別の部隊だったことやバツヘムの社交性がまだ皆無だったこともあり、ちゃんと交流するようになったのはこの基地に配属されてからだだった。それまではお互いがお互いの事を人伝にしか知らなかった。バルクホルンは言わずと知れたスーパーエースで、バツヘムは世にも珍しいウィザードかつ世界初の大型撃墜例となった戦闘に参加しているため、知らないことの方がありえなかった。

「ところでバツヘム」

「はい」

「ああ……そう、体調はもういいのか？」

「ずいぶんと良くなりました。後はスタミナと体重だけです」

「何このぎこちない会話」

ハルトマンは入室するなり面倒くさそうな声色で二人に聞こえるようつぶやくと開いているソファアを一つ丸ごと占領する用に寝転がった。

「二人ともあつてから結構経つのにほとんど話したことないよね」

「誰かさんと違っていちいち注意しなくてもいいからな」

「ハルトマン中尉、部屋片づけましたか、あれは人の住む環境ではありませんかよ」

「そうだぞハルトマン。いい加減あの足の踏み場もない部屋をどうにかするんだ」

「なんでこんなときばっかりいきびったなのさ！」

この時のバツヘムはまだハルトマンの部屋掃除を手伝わされることなど知る由もなかった。ハルトマンもまた、それが理由で大いに恥をかくのだが、やはり想像もしていない。

やがて夕食を迎え、それも済ませるとそれぞれは夜間哨戒担当のトリトヴァクに仕事を引き継いで就寝準備へと入った。食事中に翌日はハルトマンの叙勲式があると改めて業務連絡がなされたが、そういうことになれていない新人の二人以外は特に気にした素振りもなかった。

翌朝、一番からバツヘムはイエーガーと共にヴィルケのお叱りを受けた。

しばらくやめていた朝練を最近再開したバツヘムはその日も軽いランニングを終えて食堂へ向かう途中だった。バツヘムの部屋は寮の最奥にあるため、食堂へ行くには数名の部屋の前を通る必要があった。そのうちの一人がイエーガーである。部屋で制服に着替えたバツヘムがイエーガーの部屋の前を通りかかると、そこには部屋の扉を全開にして歯を磨く下着姿のイエーガーが立っていたのだ。

数秒間視線が交錯するも、バツヘムは何事もなかったかのように挨拶

撈だけをして通り過ぎようとした。イエーガーはイエーガーで小さく返事するだけで特に気にする様子もなかった。

た。

「待ちなさい二人とも、というかシャーリーさんは早く服を着てきなさい」

「おはようございますヴィルケ中佐」

「ええおはようバツヘムさん。ところであなたにもおかしいとは思わないのかしら」

「……さすがに下着姿で扉を開けつぱなしにするのは常識を疑います」

「そうだけどそれだけじゃないわよね」

「おはようございます中佐。で、あたしになにか用ですか？」

「おおそ自分の常識とは合わない反応にヴィルケは頭を押さええうなだれた。

「シャーリーさん、あなた今男性に下着姿を見られたのよ。少しは恥ずかしいとかないのかしら」

「まあユニヴェルだし」

「バツヘムさんはそれでいいの!?!」

「言われようが少し遺憾ではありますが、働きやすいのでかまいません」

「……そう。とにかく二人とももう少し危機感を持つこと」

疲れた様子のヴィルケをしり目に二人は朝食のため食堂へ向かうのだった。その道中、ハルトマンをたたき起こすバルクホルンの怒号が鳴り響いたが、この基地ではいつもの事なので誰も気に留めない。食堂には大量の蒸かし芋が用意してあり、しかしそれもあまり料理をしない人が集まったこの基地ではよくある光景だった。

後から来たバルクホルンとイエーガーにも加わることなく食べ進めていると、クロステルマンが扶桑の女子制服である水着を片手に食堂へ飛び込んできた。バツヘムは口にこそ出さなかったが、とうとう坂本少佐のものに手を付けたかと内心でつぶやいた。しかしそんな思考もクロステルマンの悲鳴でかき消された。

「あつあなた、こつちを見ないで！」

「おいおいいきなりどうしたんだよペリーヌ」

「いいから早くバツヘムさんを別室へ！」

「わかりました。自室に戻ってますので理由は後でお願いします」

自らの服の裾を引つ張りながら尋常じやない焦り方を見せるクロステルマンにバツヘムは深い追及はせずおとなしく退室した。廊下に出ると、ばったりと出くわした宮藤が同じような反応をしたのでバツヘムは急ぎ足になって自室へと帰った。

叙勲式を目の前に何のトラブルを起こしたのか、バツヘムは自分だけが離されることや、宮藤とクロステルマンの反応からズボンがなくなったのだらうとあたりを付けた。それゆえに内線電話で事情の説明も求めないし、呼ばれるまで、それこそネウロイが来るか火事にもならない限り部屋を出るつもりはなかった。ネウロイに関しては事前の予報でないと割り切っているため実質火事のみだった。

そうタカをくくりうとうとしていると、彼の耳に予想外の警報が届いた。反射でアンテナを出すもネウロイの反応はなかった。それがなおさら彼を焦らせた。観測所のレーダーに映るのに自分の物には映らないことは初めてだったからだ。とっさに新品の長ズボンを何本か握りしめて先に来ていた隊員たちが何やらもめていた。

「待てバツヘム、まだ来るな」

バツヘムにいち早く気付いたバルクホルンはバツヘムを止めに駆け寄った。

「これを何も身に着けてない人に渡してください。新品ですので安心してください」

「気づいてたのか」

「そんな気がしただけです。それより早く出ないと」

「そうだな、すぐ配ってくる」

一悶着はあったものの全員が履き終えるとようやく出撃準備が完了した。ストライカーを装着し出撃するため滑走路に出ようとしたその時、駆け付けたヴィルケによって出撃に待たがかけられた。

「敵はいません、警報は間違いです」

「道理で反応がないわけだ」

自分の不調ではなかったことに胸をなでおろした。事の次第を聞くときさらにため息が出た。

「バツヘムさんもこれありがとうございます」

「いえ、宮藤さんから皆さんに、それはもういらないので焼くなり捨てるなり各自で処分するよう言っておいてもらえますか」

「え、捨てちゃうんですか？」

「ここは補給も良好ですからね、ズボンくらいすぐに新しいのを送ってもらえます。それに人の身につけたものはあまり着たくないです」

バツヘムは言うだけ言うと、叙勲式のための設営を手伝いに向かった。

そもそもルツキーニのズボンはなぜ脱衣所で消えたのか、その疑問が解消され、さらにはそれが原因でハルトマンの部屋掃除が始まったのはすべて叙勲式の後の話である。

第十二話

その人形を見てバツヘムはわかりやすく顔をしかめた。

長い黒髪をなびかせ、ストライカーユニットを履きこなす。凜とした意志の強い顔立ちの人形は、彼にかつての上官を思い出させる。

「話聞いてますかバツヘムさん……バツヘムさん！」

「ああ、申し訳ありません」

「このお人形そんなに気になるんですか？」

「えっバツヘムさんてお人形好きだったんですか！」

「違います。その人形が知り合いに似ていたのでつい。それよりも私にお話って何ですか。あまり女性の部屋に立ち入らないようにしたいので手短にお願いします」

宮藤はバツヘムとすれ違いざまに、廊下では少し話しにくいから部屋に来るようにお願いをした。普段であれば断っていたバツヘムだが、彼にはその話の心当たりがあった。というのも彼は宮藤と入れ違いで格納庫にいたのだ。そのため普段から交友のある整備士から、先ほどの出来事を聞き及んでいたからだ。そういう話を廊下で大きな声で話さなくなっただけでも成長かと、バツヘムは彼女らについていくことにした。

「バツヘムさんはあのルールおかしいと思いませんか」

「芳佳ちゃん、あのじゃわかんないと思うよ」

「あつ、ウィッチと男の人が基地内でお話もダメっているルールなんですよ」

「いえ別に。ここほど厳格にしているところも珍しいですが、ウィッチの性質を考えると理解できます。というか最前線まで来てそんなことをいちいち聞かないでください」

宮藤とビショップは固まった。それ以上何も言わず一方的に話を切り上げたバツヘムは足早に部屋を出ると、執務室から戻ってきた坂本とちようど出くわした。

「バツヘムが人の部屋にいたなんて珍しいな」

「少し懐かしいものを見てしまったので」

「懐かしいもの？」

「宮藤さんが持つていた扶桑人形が穴拭さんに似ていました。あの
人、扶桑だと大英雄だつて話本当だったんですね」

「ああそういうことか……それで今思い出したが、お前そのころから
同じ部隊の仲間にも言わずに移籍してたんだな。昔聞いた灰色で
無口で物音すら立てないカールスラントの女の子。特徴としては当
てはまる。というか一緒の基地にいて自分が男だつて言つてなかつ
たのか」

「言いました。でも穴拭さんは人の話を聞かない人でした。その証拠
に穴拭さん以外はみんな知ってますよ」

バツヘムがウンザリ気味に言うのと坂本も納得したように声を漏ら
した。

「それはそうと部隊で一番というか唯一というか、真面目に訓練に取
り組んでいたとも言つていたな」

「ほかに真面目に付き合う人がいなかったからで、そうしないと機嫌
悪くなるし」

坂本は乾いた笑いを漏らした。

「その頃の仲間とは今でも連絡を取り合っているのか？」

「数名、今でも手紙をくれる方はいますが、基本的にはいいえです。そ
れにせつかく退役して戦場から遠のいたのに、最前線の軍人の近況な
んて聞きたいわけがありません」

「私はこの先、退役した後でも、お前たちから手紙が来たらうれしい
ぞ」

バツヘムは曖昧に頷くのみで、納得していないことは、坂本の目か
ら見れば一目瞭然である。その態度に対して坂本は「楽しみにして
る」という言葉と一緒に数度頭を軽く叩いた。

その晩、バツヘムは書き物机に向かつていた。机の上には、便箋と
万年筆が置かれている。彼が便箋に向き合つてからすでに二時間が
経過しているが、便箋には宛名だけしか綴られていない。

あまりに筆が進まないものだから、彼は食堂でお茶をお呑んで帰つ
てくるまでに書き出しが思いつかなければ、諦めることにした。

そういった理由で食堂へ行くと、そこにはすでに夜間紹介へ出かけたはずのユーティライネンが、落ち込んだ雰囲気ですわ。

「なんだ、お前かよ」

「マシントラブルですか」

「そう。出る直前になって見つかったんだ。おかげで今日はサーニャ一人で夜間哨戒やってる。そっちはどうしたんだよ」

「……まあ、少し」

「バツヘムって、思ったよりよく悩むよな」

「お恥ずかしい限りです」

「いやいいんだけどさ。でもねーちゃんに聞いてた話と違うから」

「……ユーティライネン大尉ですか」

「私もユーティライネンだぞ」

数秒の沈黙の後、バツヘムは「アウロラ大尉」と言い直した。

「そういうところは聞いたまんまだな」

「そうですか」

バツヘムは二人分の紅茶をいれて、卓についく。

「私もユーティライネン少尉のことは大尉から時々伺っていました」

「ねーちゃんに付き合わされたんだな」

「写真も見していただきました」

「サルミアツキをやるからその写真のことは忘れてくれ頼む」

「ではアウロラさんから聞いたと思しき私の失態についても口外無用でお願いします」

二人は静かに握手を交わした。

結局、お茶を飲み干し部屋に戻るも、何も思い浮かばなかったため、バツヘムはひとまず諦め、床に就いた。

翌日。最近でははずされることが増えた襲撃予想は珍しく的中したため、ためバツヘムはヴィルケと小隊を組んで出撃した。背後には直掩につく坂本・宮藤小隊がいる。バツヘムは宮藤に背中を撃たれないかどうか不安である。

やがて坂本が敵機を補足すると、パターン通りのフォーメーションへと展開される。しかし突如として、六面体のネウロイが小さく分裂

し、広範囲に散開した。それぞれの眼前には夥しい量のネウロイが散らばるも、コアはその数多いネウロイたちの中のどれか一機である。「総勢二百十機か。勲章の大盤振る舞いになるな」

坂本が茶化したすぐ後、ヴィルケから作戦の変更が言い渡される。各方面へ散らばった内、最も敵の数の多い正面へバルクホルン隊、その次に多い右方面へクロステルマン隊がそれぞれ割り当てられる。続いて坂本はコアの搜索に専念し、ヴィルケと宮藤はその援護へと回る。バツヘムはヴィルケらよりもさらに一回り前方で、なるべく坂本らの方へ照準が向かないよう、敵を引き付けながら戦うことが命じられた。

命令通り、単騎で敵機十数機を引き付けるバツヘムは、囲まれないよう、また背後を取られ続けられないよう立ち回りながら、時折弾丸を敵を見もせず弾丸をばらまいていた。にもかかわらず弾丸が、彼自身のストライカーにかすりもせず、だが吸い込まれるようにネウロイに命中する光景は、坂本の「あれが曲射か」という言葉を聞くまでは宮藤には理解できないものであった。

坂本がコアを補足し、撃破されたのは、戦場が大陸に到達するころ、バツヘムは弾切れを起こし、ヴィルケらと合流を果たしていた。その際彼についていたネウロイたちは一掃されている。

「バツヘム、まだ行けるか」

「このマガジンを撃ち切れば、後は拳銃とナイフしかありません」

「早い所見つけないとね」

「コアの気配はあるんだが、あの群れの中には見つからないんだ」

「上ッ！」

宮藤がとつさに数機を撃墜した。撃ち漏らした内の数機にコア持ちが発見されると、バツヘムはそれを追う彼女らの露払いを任せられた。

コア持ちが見つかったからの決着はそれまでの苦戦に比べると早く、また撃ち落とした者も大方の予想に反して宮藤であった。

コアが破壊されたネウロイたちは真っ白に爆散た。ウィッチたちは慣れた様子でシールドを展開し、それぞれで対処する。その後、カ

レー港に極めて嫌な記憶があるバツヘムは、ヴィルケがそちらへ近づくよりも前から、努めて視界に入れず、団体行動の中で許される限り距離を取った。

帰投後は、ヴィルケのコンサートのために準備へと駆り出された。式典用のマイクを引つ張り出し、通信所との話をつけたりと、隊員たちや基地の職員はせわしない。そんな準備も終わり、食事当番のバツヘムはそのまま食糧庫へ向かおうとしたが、艦隊の見送りから戻った坂本らによって行く手を阻まれた。

「なんですか」

「なんですかも何も、これからミーナのコンサートだぞ」

「はい、知ってます」

「バツヘムさんも行きましようよ」

「そろそろ夕食を作らないと夜間班の夕食に間に合いませんので。それに歌なら館内放送でも聞けますし」

「でも絶対直接聞いた方がいいですよ。お夕飯づくりなら私も手伝いますー」

「宮藤の言うとおりで。きっとミーナもその方が喜ぶ」

「喜ぶとかそういう雰囲気じゃないように見えましたけど」

「つべこべ言うな」

結局バツヘムは坂本らに連れられて直接ヴィルケの歌を聴くことになった。

ミーティングルームで、バツヘムは一瞬ヴィルケのドレス姿に固まったものの、それ以降取り立てる反応は何も起こさず、コンサートが終わればだれよりも早く部屋を飛び出して夕食づくりに取り掛かった。宮藤が厨房へやってきたのはその約三十分後のことだ。

「わっすーいほとんど終わってる」

「お手伝いなら結構です。皆さんと待っていてください」

「……バツヘムさん、どうして何も言わずに出て行っちゃったんですか」

「私は語彙が薄いので。それに水を差すのも気が引けました」

「そんなこと——」

「宮藤さん、きつきの言葉は取り消します。配膳のお手伝いをお願いしてもいいですか」

バツヘムの有無を言わせない雰囲気宮藤は言葉を飲み込んで頷くだけだった。

消灯後、バツヘムは昨晚に続き今晚も照明の落とされたダイニングで頭を悩ませていた。テーブルの上には沸かしたただけのお湯が入ったティーカップが一組あるのみで、香りも何もない。そんな折にヴェルケは現れた。

足音で誰かが来ることを察していたバツヘムに対して、誰もいないと思っていた彼女は、バツヘムを見つけるなりわずかに肩を震わせた。

「こんな時間に珍しいわね」

「申し訳ありません。すぐに片づけます」

「大丈夫よ。それに私も人のことは言えないもの」

バツヘムがお茶を用意しようと立ち上がるのを手で止めると、慣れた手つきでお湯を沸かし始めた。夕方に来ていたドレスから普段着に戻った彼女はそのままお茶を淹れてバツヘムの正面へと座った。

「それで、何か悩み事？」

「いいえ。ただ、少し慣れないことをしようとしていて」

「じゃあ私と同じね。といっても私は久しぶりすぎるだけだけど」

「はい、左様ですか」

「……あなたは何も言ってくれないのね」

「私はどうやら語彙が薄いらしいので、なんとお伝えすればよいのかわかりませんでした」

「本当にそれだけ？」

彼女の覗き込むような言葉にバツヘムは悩まし気に顔をしかめた。

それからバツヘムが返答したのは数分後のことだ。

「あの歌もドレス姿も響きも、血と泥と腐臭の戦争しか知らない私がふれてよいものではないと思いました。戦争以外の人生を本気で生きていた人しか歌えないと思いました。人さまには言えないようなことまでした私が、なんと言葉を尽くせばいいかわからない。本当

にそれだけです」

「とても尊んでくれたのね。でも私には、戦争で知り合ったあなたも歌やドレスや思い出や他の隊員と同じ大切な家族よ。だから、高価な言葉なんて探さなくても、思ったままでもいいの」

「それは、手紙も同じですか?」

「慣れない事ってそれだったのね。そうよ、思っていることや伝えたいことをそのまま書けばいいの」

「……そっか」

納得したようにつぶやいた。カップに残っていたお湯を一息で飲み干したバツヘムはそのままの勢いで立ち上がり、改めてヴィルケの方へと姿勢を正す。

「ありがとうございます、おかげで手紙が書けそうです」

「お役に立ててうれしいわ」

「それと、とても綺麗でした。また聴ける日を、今度はどこかの劇場で、その日を楽しみにしています」

立て続けに言うだけ言ったバツヘムは、その返答も待たずして自室へと早足で戻った。

バツヘムは書き物机の前に一瞬だけ立つと、簡単な一言だけを記してそれを封筒へと納めた。

後日、手紙が送られてきた穴拭は「元気です」の簡素すぎる近況報告と、もう一枚の便箋をビューリングに届けてほしいというお願いに苦笑いで悪態をついた。